

退魔巫女

小説：端音 乱希

挿絵：Ixy





目次

目次・登場人物紹介	P2
本編	P3～P57
あとがき・奥付	P58

登場人物紹介

●神楽坂 咲良（かぐらざか さくら）

妖魔と戦う退魔巫女の少女。神気を身に纏い、巫女装束姿に変身する。
幼少から退魔巫女の里で厳しい修行を積んでおり、高い実力を持つ。
妖魔相手に負け知らず。
神気を宿した札を飛ばして攻撃する。
最近街の中に、妖魔が頻繁に出現するようになり、その理由を探るため、
都会の学校に通っている。
垢抜けた髪型は友人の影響によるもの。

●妖魔

古くから存在し、人間に災いをなす妖の総称。
主に人間の負の感情が蓄積されることで形成される。
退魔巫女が操る神気が弱点。強い神気に触れると消滅する。

第1話 穢れなき退魔巫女は淫らな快楽を知る

1

妖魔の気配がする。

夜の街、人々が行き交うネオンの下で、私は微かに邪悪な気配を感じ取った。意識を集中し、その存在をより深く探っていく。

（方角は、こっち！）

そう遠くはない。私は大通りを逸れ、脇道へと入る。明るさと喧騒から遠ざかっていくにつれ、妖魔の気配は大きくなっていった。

（見つけた……！）

ビルに囲まれ、見通しが悪くなっている細い通路で、私は妖魔の姿を確認する。

身長1メートル程度で小柄な体軀、そして緑色の肌——『餓鬼』だ。

その数は3体。私が奴らを視認すると同時に、奴らも私の存在に気づく。

「グギャアアッ!!」

餓鬼は醜く歪んだ口元から唾液を垂らしながら、私に向かって飛びかかってきた。

（やっぱり、色欲型か……）

餓鬼は、人間の欲が形になった妖魔だ。その欲とは、昔は食欲がほとんどだったが、ここ数十年で、性欲が元になることが増えている。それを私たちは色欲型と呼んでいた。人間の性欲の権化とも言える存在だ。

奴らは私のように若い女性を見つけると、その欲を満たすため、浅ましくも飛びかってくる。

餓鬼の体は小さいが、力は成人男性よりも強い。動きも素早い。普通の女性が餓鬼3体に狙われたら、あっさり捕えられ、奴らの尽きること知らない欲望を、その身に受け続けなければならぬだろう。

だが私は、『普通の女性』ではなかった。

餓鬼の手が私を掴もうと伸ばされる。しかし、私に触れる寸前で、餓鬼の手は稲妻に撃たれたかのように激しい光に包まれ、皮膚が黒く焦げた。

「ギッ、グガアアアッ!!」

餓鬼が腕を押さえて後ずさる。他の2体の餓鬼も、驚いた表情を浮かべて私を見上げた。低級妖魔である餓鬼は、私に触れることすらできない。私の体は『神気』を纏っているのだから。

「神気、現装！」

私は体内の神気を、体の表面に展開させた。神気の力により、私が身に着けていた制服が淡い光を帯び、退魔巫女の装束へと変わっていく。

セーラー服は白衣に、スカートは緋袴に、ローファーとソックスが膝下までのロングブーツに、それぞれ変化する。神気によって生成されたこれらの装束は、暗闇の中でもうっ

すらと輝いていた。

私のイメージによって形作られた装束は、普通の巫女装束とは意匠が異なっている。動きやすさを重視した、戦闘に特化した形状になっていた。

「グッ、ギギギ……！」

私の姿を見て、餓鬼達はだじろいである。妖魔を祓う退魔巫女存在を、彼らは知っているのだ。私から距離をとるために、じりじりと後退していく。

「逃がさないっ！」

私は白衣の袖から神符しんぷを取り出す。その数3枚。相対する餓鬼の数と同じだ。

神符に神気を籠めると、札に描かれた神の霊しんが淡く輝いた。

「正道に還りなさい！」

私は腕を振るい、餓鬼めがけて神符を放った。神気が籠った神符は、私の意思で自由に操ることができる。神符は逃げようとする餓鬼達を追従し、その小さな体に張り付いた。

「グギアアアアッ!？」

悲鳴を上げる餓鬼達。神気に包まれたその体はものの数秒で崩れ落ち、塵となって虚無へと消えた。

餓鬼の体を消滅させた神符は、私の意思により手元へと戻ってくる。

（これ以上はいないみたい）

私は妖魔の気配が消失したことを確認してから、身に纏っていた神気を体内に戻していく。神符は光を失い、巫女装束は元の制服へと戻った。

（やっぱり妖魔の数、増えている……）

従来は田舎の山村部に出現する妖魔が、都会の真ん中に出現している。それも、かなりの頻度で。

（妖魔が出現する要因を、早く取り除かないと……!）

それが私、神楽坂咲良かぐらざき らに与えられた、使命なのだから。

2

私の実家は、内陸の山奥にある神社だ。

参拝客などまったく来ないこの小さな神社は、代々退魔巫女の家系が治めている。周囲の集落に住む者は皆、神社の関係者で、そこは退魔巫女の里、とても呼ぶべき地域になっていた。

退魔巫女。

その名のとおり、魔を退ける存在だ。

神社の裏手の山には、様々な奇跡を起こすことができる神の力“神気”が溢れる場所があり、この神社に生まれた女性はお産直後からその場所に運ばれ、神気を浴び続けることになる。長年その身に神気を浴び続けた結果、体内に神気が蓄積され、それが退魔巫女の力の源となるのだ。

私も幼いころから神気に触れ、退魔巫女となるべく育てられた。

中学校に上がる頃には妖魔退治の実験を経験し、それ以降、妖魔出現の情報を聞きつけると、近隣だけでなく遠方まで出向き、退魔巫女の力を振るってきた。

邪悪な妖魔は神気に弱く、触れるだけでその身を焦がしてしまう。妖魔にとって退魔巫女はまさに天敵と言える。これまでに私は数え切れないほどの妖魔と戦い、その全てを塵へと変えてきた。

私はこの一生を妖魔退治に捧げるのだと理解していたし、それに対して特に疑問を抱いてはいなかった。

しかし、進学する気などまるでなかった私に、祖母はこう告げた。

「咲良、お前は街の学校に通うのだ」

「……え？」

その言葉に私は驚いたが、祖母の説明を聞き、納得することになる。

最近街の方で、妖魔の目撃情報が多くなっており、その対処に困っているというのだ。昔から妖魔は人を避け、田舎に出現するのが常であったため、都会には退魔巫女がいないのである。神気が溢れる土地、すなわち退魔巫女の里は、全国各地に存在しているが、どれも自然豊かな過疎地のような場所にしかない。

そのため、進学にかこつけ、私を街に送り込み、妖魔を退治させようという算段だった。

この年になると、神気に触れても、体内に神気を蓄積させることができなくなってしまうので、里に留まって活動する必要はない。それにこの采配の裏には、これからの時代を見据え、私にある程度勉学を収めてもらいたいという、祖母や母の想いもあった。断る理由はなかった。

「分かりました。私は街の学校に通って、街にいる妖魔を倒します」

長年暮らしてきた場所を離れるということに対する不安も、もちろんあった。そんな私の心境を最も見抜いていたのは、同じく退魔巫女である私の姉だった。

「咲良、辛いことがあったら、いつでも連絡するのよ」

「うん、ありがとう、お姉ちゃん」

「そうだ、これをあげる」

「……？ これは、指輪？」

それは、宝石などの装飾のない、シンプルな銀色の指輪だった。姉はそれを私の右手の小指につける。

「進学のお祝いよ。無くさないでね」

「もらっちゃって、いいの？」

「いいのよ。ずっと身に着けていれば、いいことあるかもね」

「分かった！ ありがとう！」

「街はいろいろと誘惑が多いから、気を付けて」

「うん、分かってる」

姉の言いたいことはすぐに分かった。私達退魔巫女は、純潔、すなわち処女を失うと、神気を体内に留めておくことができなくなる。処女を喪失した後は、絶頂を迎えるたびに、体内の神気が失われてしまうのだ。

街で暮らすことで男性との交流も増えるだろうが、男と交わるようなことはあってはならない。

私もいすれは、子を宿し、次世代の退魔巫女を育てなければならないが、今はまだその時ではなかった。

「私は退魔巫女だもの。不用意に神気を失うようなことはしないよ」

「そうね。咲良、あなたなら大丈夫よね」

「安心して、お姉ちゃん。私はちゃんと、使命を果たすから」

私は姉や他の家族に見送られ、街での一人暮らしを始めた。

街に巣くう妖魔を殲滅する。そして、街に妖魔が増えた原因を探る。どちらもさほど難しいことではない。

と、その時の私は考えていた。

3

私が街で暮らすようになってから、3ヵ月が過ぎた。

私は毎晩パトロールを行い、妖魔を見つけては退治するという生活を続けていた。街に妖魔が増えていくという話は確かに本場で、これまで2日に1回のペースで妖魔と遭遇している。

遭遇した妖魔のすべてが餓鬼であり、私は問題なく仕留めることができていた。

だが、餓鬼が頻繁に出現するというのは、明らかに異常事態である。餓鬼とは人間からこぼれ落ちた欲の欠片が蓄積されて生まれるものなので、毎日のように出現するというのは本来あり得ないのだ。

やはりこの街には、餓鬼の出現を助長している何かがあると考えるべきである。しかしここ3ヵ月の間、それらしい要因の発見には至っていない。

被害が出る前に、それを突き止めなくては――

「咲良、もうちょっと髪伸ばさない？」

「今の長さだと、できる髪型に限られるからね」

私の思考を、友人たちの声が遮った。

昼休み。昼食を終え、考え事をしていた私のところに、マリとミカの2人がやってきて、髪型を好き勝手にいじっていた。

髪型に無頓着な私はその行為を放置していたのだが、声をかけられたのなら答えるのが礼儀だろう。

「伸ばすと動きにくくなるから、短い方がいいな」

「どうして？ 咲良は部活やるわけじゃないし、動きやすさとかいいでしょ」

「うん？ まあ、そうだけど、夜とかあるし……」

「夜？」

「いや、なんでもない」

「どつせすぐには伸びないけどね」

「だから伸ばさないってば」

この2人は、私がこの学校に入ってからできた、数少ない友達である。2人は中学生時代からの付き合いらしく、とても仲がいい。

そんな2人が私を目に留めたのは、私の外見がいかにも“田舎者”だったからである。なにしろ幼いころからずっと、退魔巫女の修行に明け暮れていたで、自らの外見を気にする余裕なんてなかったのだ。

「あんた、ダサいわよ」

という辛辣な一言から始まり、

「ちょっと弄らせて」

と、私の髪型を変え、化粧を施し、制服の着こなしを整えることでようやくまともに見られるようになったらしく、

「素材はいいんだから、ちゃんしないと損だよ」

「うんうん。これからも、私たちが見てあげる」

という流れになった。

彼女達からすればちょうどいい着せ替え人形が見つかった程度の話しなのかもしれないが、私からすると、これから都会で暮らすわけなのだから、少しでもふさわしい外見になることはやぶさかではなかった。

彼女達が進める美容室に行き、軽い染色とパーマをしてもらった。簡単な化粧を覚え、スカートの丈を含めて彼女達に言われたとおりに制服を着用した。

確かに、それで見違えた。私が見ても分かるほどに、都会らしい女子学生ができた。

「やっぱり、私達の見目は本物だった」

と、2人はアイドルをデビューさせたプロデューサーのようなことを言い、それ以降も、いかに私を可愛くするか“という彼女たちにとって特にメリットのない行為を続けてくれている。

「咲良はスタイルいいから、何を着ても似合うと思うの」

「胸は普通だから、あんまり強調されないほうがいいよね」

いつの間にか2人の話題は、私の私服をどうするかに及んでいるようだった。一人暮らしに不自由しないくらいの仕送りももらっているものの、高価な服飾品を購入する流れになるのは望ましくない。

多くのクラスメイトと接することで分かったことだが、私の身長はちょうど平均的くらいで、体型は多少痩せ形のようなだった。胸は普通と言われたが、平均よりは少し大きいと思う。

いや、大きいからって嬉しいわけじゃないけど。むしろ戦闘の邪魔になるので小さい方がよかったくらいだ。

「咲良、その指輪、いつも付けてるけど、お気に入りなの？」

マリが私の小指にある指輪をつつく。

「えっ？ そう……これは、特別、だから」

姉から貰った指輪は、いつも肌身離さず身に着けていた。これを見ると、1人で不安な時でも、あの強く優しい姉が見守ってくれているような気がする。

「特別って、もしかして、彼氏からの贈り物？」

「え？ 咲良って、彼氏いるの？」

「いっ、いないからっ、そんなのっ……！」

「慌てるってのは、怪しいなあ」

「顔赤いんじゃない？」

「そんなことない！ 違うからね！」

私の様子を見て、2人が無邪気に笑う。私は怒ったように顔を膨らませてみせる。

妖魔の気配のない、私の日常。妖魔のことなど忘れて、彼女たちと心から学校生活を楽しめたら、それはどんなに幸せなことだろうか。

だが、彼女達の笑顔を守るためにも、私は戦わなくてはならない。妖魔を倒し、人々の日常を守ることが、私の役目だ。

「あっ、もうこんな時間」

「あゝ、授業だるう」

予鈴が鳴ると、2人は自分の席へと戻っていく。

「いや、髪型っ！ 中途半端なところで止めないで！」

私の髪型は、片方だけが結われた状態になっていた。ツートールにしたかったのは分かるが、この状態で放置するのはやめてほしい。

彼女たちと穏やかな日常を過ごせたのは、その日が最後となった。

4

その夜、パトロールをしていた私は、妖魔の気配を感じ取った。妖魔の居場所へと、素早く移動する。

そこは、団地に囲まれた小さな公園だった。街灯のないその公園の片隅に、

(……いた！)

影は2体。1つは体格からいって餓鬼だろう。そしてもう1つは……

(あれは、人間……？ まさか……？)

成人男性のような体格。スーツを着ており、普通のビジネスマンのような姿だ。

2つの影は向かい合って、何か会話をしているようだった。だが、妖魔と会話する人間なんて、聞いたことがない。

(あの人も妖魔……？ そうは見えないけれど……)

予期せぬ光景に、私は慎重に様子を伺う。やがて餓鬼と男性の会話は終わり、男性の方が公園から出ていく。残された妖魔はきょろきょろと辺りを見回していた。

(こうしていても仕方がない。行かなくちゃ)

「神気、現装！」

私は体内から神気を解放し、巫女装束姿へと変身した。

「はああっ！」

そして餓鬼がこちらに気づくよりも早く、神気を帯びた神符を放つ。

「グキッ!? ガアアァッ!!」

神気に体を焼かれた餓鬼が、断末魔の悲鳴を上げながら、夜闇へと消える。

餓鬼は片づけた。辺りにはもう、妖魔の気配はない。と、いうことは、先ほどの男性は、やはり妖魔ではないということになる。

(どうして人間が妖魔と……?)

私は巫女装束姿から制服姿に戻りながら、男性が立ち去った方角へと向かう。

細い路地を歩く男性の後姿は、すぐに発見できた。こちらに気付いた様子はない。

(追いかけよう。何か、分かるかもしれない)

声をかけて問い詰めるという手もあったが、相手の正体が分からない以上、逃げられてしまったらそれで終わりだ。

私は息を殺して、その男性の後を追う。

その男性は大通りに出て、黙々と歩き続けていた。歩くこと十数分。男性は巨大なビル of 建つ敷地内へと足を踏み入れる。

(ここは……?)

敷地の隅にあるプレートには、このビルを所有する企業の名前「グロード」と書かれていた。

(あのグロードの本社ビル? ここが?)

田舎者の私でさえ知っている企業名。日本有数の医療機器メーカーで、多数の先進的な医療機器を開発してきた実績を持つ企業だ。

時刻は既に深夜に近いということもあり、その50階くらいはありそうなビルにはほとんど明かりは点いていない。

男性はビルの側面に沿って進み、スーツのポケットから鍵を取り出して、従業員用の裏口と思しき扉を開けると、その中に入ってしまった。

(しまった……)

顔も十分に確認できないまま、逃げられてしまった。グロードの関係者らしいということとは分かったが、これだけの大企業だ、社員だけでも何千人というだろう。

こんなことなら、もっと早く声をかけておくべきだった。と後悔しながらも、念のため男が姿を消した扉へと向かう。

100パーセント中から鍵がかかっていると思いながらも、ドアノブを回すと――
ガチャリ。

「あれ……?」

開いた。開いてしまった。先ほどの男は、施錠を忘れてしまったようだ。

(不用心すぎるでしょ……)

私は扉を開け、中を覗き込む。真っ暗な通路が伸びており、男の姿は見えない。

(どうしようか……)

私は迷った。このまま中に踏み入るべきか。それとも一時撤退するべきか。

妖魔の手掛かりを探すためとはいえ、この中に入れば、建築物侵入の罪に問われてしまう。だが、ここで引き返してしまったら、再び今の男まで辿り着ける可能性は低いだろう。

しかし、そんな私の迷いは、杞憂に終わった。通路の奥をよく見ようと、顔を扉の内側まで入れた時、

「……！」

妖魔の気配がした。それも、たくさん。

（この中に、妖魔がいる……!?）

とす黒く、濃い、邪悪な気配。もはや瘴気が漂っていると表現できるレベルだ。これほどまでに強烈な妖魔の気配を、これまでに感じたことはない。

（どうして、こんな近くになるまで、気がつかなかったの……？）

答えは1つしかなかった。このビル建物全体に、妖魔の気配を外部に漏らさないための結界が張られているのだ。私が結界の中に顔を突っ込んだことにより、初めて妖魔の気配を感じることができたのである。

そして、私が結界内に入り、相手の存在を感じ取ったということは、この結界の主にも、私の存在が伝わったということになる。

迷っている時間はなくなった。

「神気、現装！」

私は再び退魔巫女の装束に身を包むと、暗い通路の中に飛び込んだ。長い袖口と短い袴が、ばたばたとためぐ。

細い通路を抜け、開けたロビーに出た瞬間、複数の小さな物体——餓鬼の群れに襲われた。

（いきなり来た！）

「はあああっ！」

神気を込めた神符を宙に放った。手持ちの神符は8枚。敵の数はそれよりも多い。

近い餓鬼から順に神符を貼りつけていき、その体を消滅させ、また次の餓鬼に貼りつける。この餓鬼達は統率がとれておらず、襲ってくるタイミングはバラバラだったので、8枚の神符でも十分に対応できた。

1分もかからないうちに、30匹近くいた餓鬼はすべて塵と化した。

（これで、終わり……じゃない）

妖魔の気配は相変わらず強い。階上、つまり真上から、強い気配を感じる。

（上に昇るには、階段？ エレベーター？）

上の階に昇る手段を探して周囲を見回した、その時、

「うわあああああ！」

男の悲鳴が聞こえた。

「……！」

私は声のした方に駆け出した。ロビーの裏側、エレベーターホールの中央に、白衣の男性が4人。そして彼らを取り囲むように、餓鬼が5匹。

「離れなさいっ！」

勢いよく飛ばした5枚の神符が、餓鬼の体を捉える。

「ギアアアッ！」

消滅していく餓鬼達。私は周囲に他の餓鬼の姿がないことを確認してから、神符を手元に戻した。

「大丈夫ですか？」

私は白衣の男達に近寄る。

「た、助かったあ……!!」

「何だいまの化物は……!!」

「君は一体……その格好、さっきの光は……?」

「君が倒してくれたんだろ? 命の恩人だ!」

男達が私にすぐりつく勢いで近寄ってきたため、慌てて後退する。餓鬼に襲われたことによる恐怖と、そこを救われた安堵が合わさり、混乱している彼らの心境は分かるが、必要な接触を許すほどの寛容さは私にはない。

「怪我がないのなら、早くここから逃げてください」

「あ、ああ……しかし、なんで俺達の会社にあんな化物が……」

「君はあの化物の正体を知っているのか?」

この人達は、グロードの社員らしい。白衣を着ているところを見ると、研究員だろうか。こんな遅くまで残って研究とはご苦労なことである。だが、遅くまで残っていたがゆえに、この騒動に巻き込まれてしまったということになるので、不運というか、報われないというか。

「妖魔については、知らない方がいいです」

妖魔とは、人間社会の闇に潜む物。関わらずに生活できるのが一番だ。

この研究員達は、自分達の会社が妖魔の巣窟になっていることを知らなかったようだ。私にとっては息が詰まるほどの瘴気も、一般人は感知することはできない。ただ、こんな邪悪な気配の中で仕事をしていたら、誰か体調を崩す者がいてもおかしくない。

「それより、さっきこの建物に誰が入ってきましたか? スーツを着た男の人なんですけど」

「スーツ? ああ、社長か」

「社長!」

あの男性が、グロードの社長? 大企業の社長といえば、私からするとおじいちゃんくらいの年齢というイメージだが、あの男性はせいぜい40代くらいに見えた。

こうなると、この会社全体が怪しくなってくる。深夜に1人で出歩き、公園で餓鬼と会話をする社長。そして、大量の妖魔が溢れている社内。街に妖魔が増えている原因が、この会社にあるのかもしれない。

(ようやく手掛かりを掴んだ……!)

鍵を握るのは、やはり先ほどの社長だろう。詳しく話を聞く必要がある。

「その社長さんは、どこへ行ったの?」

「俺達と入れ違いでエレベーターに乗ったよ」

「今ごろ社長室なんじゃないか?」

「社長は無事なんだろうか、助けないと……」

社長を心配する一同。その社長がこの騒ぎの元凶かもしれない、などということは口に出さず、私はこう言った。

「私が助けに行くから、あなたたちは逃げてください。社長室は何階ですか?」

「……最上階の、55階だ」

「55階ですね」

エレベーター呼び出しボタンを押すと、すぐにチャイムが鳴って、近場の扉が開いた。

「社長のこと、任せていいのか？」

「俺たち、何もできなくて、すまない」

「君に助けられたこと、絶対に忘れないから」

「この恩は必ず返すから！」

私は盛り上がりつついる男達に愛想笑いで応えると、1人でエレベーターに乗り込み、最上階——55階のボタンを押す。

「さあ、まだあいつらが来る前に逃げて。ビルの外に出てしまえば安全ですから」

「ま、待ってくれ……君は、一体何者なんだ？」

閉まりかけの扉越しに投げかけられた質問に、私は適当に答えた。

「通りすがりの巫女です」

扉が閉じ、エレベーターは上昇を始めた。

5

最上階。

エレベーターの正面に、立派な木造りの扉がある。ここが社長室なのだろう。

そしてその扉の向こうから、一際大きな妖魔の気配が漂ってくる。これまでに多くの妖魔と対峙してきたが、恐らくそのどれよりも強大な相手だ。

（だからといって、退くわけにはいかない……私は、退魔巫女。妖魔を倒す者なのだから……！）

私は意を決して扉に手をかけた。相手の結界の中にいる以上、私の動向は相手に筒抜けだ。いくらタイミングを見計らっても、奇襲することはできない。

ガチャリ。ドアノブをまわし、扉を引く。

そこはフロア全体が巨大な部屋になっていた。薄暗い室内の床一面に敷かれているのは赤いカーペット。奥の壁はガラス張りになっていて、街の景色を見下ろせるようになっている。部屋の一角には来客用と思われるテーブルと、それを囲むように立派なソファが並んでいた。

そして、部屋の中央。大きなデスクを椅子代わりにして座っているのは、人間より一回りも二回りも大きな灰色の怪物だった。

（こいつは、牛鬼の一種……？）

顔が牛、胴体が鬼の形をしている妖魔、牛鬼。古くから日本に存在するが、主に海岸部や山間部に出現する妖魔だ。こんな街中に出現したという話は聞かない。

「退魔巫女め……どうしてここが分かった……？」

（しゃべった!?）

低く唸るような声で、牛の口が言葉を発した。人語を操る牛鬼の伝承がないわけではないが、そもそも妖魔が人語を操ること自体珍しいので、私は驚いた。

（知能があるって……？）

だが、こいつが結界を貼り、多くの餓鬼達を束ねているのだとしたら、当然のことかも

私は8枚の神符を取り出して構える。相手はデスクに座ったままだ。先手必勝、一気に決める。

8枚の神符が宙を舞い、牛鬼の体に張り付いていく。

牛鬼が苦しうな声をあげた。神符が張り付いた部分が光輝き、蒸氣のようなものを発している。

「おのれええええつ!!」

牛鬼は大きく身を反らし、深く息を吸い込むと、私に向かって黒い霧のようなものを吐き出した。

牛鬼は強力な毒を持つ。神気を身に纏っているとはいえ、この霧をまともにくらうのは危険だった。私は床を蹴り、カーペットを転がりながら回避する。

「!？」

私が起きあがる瞬間を狙って、牛鬼はすさまじい勢いで突進してきた。その大きな肩に弾かれ、私は入口の扉まで吹き飛ばされる。

私の体は激しく扉に激突した。扉の蝶番が壊れ、外向きに倒れる。私の体は激しく廊下の床に打ちつけられた。

全身を激痛が走った。呼吸がうまくできない。

すしん、すしんと足音を立てながら、牛鬼がこちらに近づいてくる。神符が張り付いた場所や、私の体を覆う神氣に触れた肩が蒸気を発していたが、存在を消し去るほどのダメージには至っていないようだった。

起き上がらなくては。ここで私が屈してしまったら、この街を妖魔から守るものがいなくなってしまう。

歯を食いしばり、激痛に震える脚を押さえながら、私は立ちあがった。私の2倍以上の大きさの牛鬼が眼前に迫っている。私はその牛鬼を、正面から見据えた。

「冗談じゃない……それも、私の台詞だからっ！」

「神槍、
軻遇突智！」

私の叫びと共に、頭上に光輝く槍が出現する。私の神気によって具現化させた、何物を

も貴く火の槍だ。
「消え去りなさいっ!」



私は腕を振り下ろし、槍を牛鬼に向かって投擲した。

「グガアアアアッ!!」

槍は牛鬼の胴体中央に突き刺さり、背中まで貫通する。牛鬼は大きな断末魔の悲鳴を上げながら倒れ、やがて塵となって消えた。

「はあ、はあ……やった……」

私は部屋の中央に移動し、その場に残された槍を神気に分解すると、体内に戻した。同時に、床に散らばった神符を手元に引き寄せる。

牛鬼の邪悪な気配が消え、建物全体を包む重苦しい空気が霧散していく。結界が解けたのだ。まだ階下からは多数の妖魔の気配があるが、巨大な力を持つ妖魔は感じ取れない。

(親玉は倒した。後は、残った妖魔を順番に掃討していくだけ……)

そう考えながら、エレベーターに向かって歩き始めた。その時、視界の端に、しなる鞭のようなものが飛来するのが見えて、私は咄嗟にその場で身を屈めた。

「……?」

その鞭のようなものは私の頭上をかすめ、飛来してきた方に戻っていく。

「誰っ!？」

私はその場に身構えながら、薄暗い部屋の隅を凝視した。

(妖魔の気配はしない、ということは、相手は妖魔じゃない……!?)

「今の回避するとは、やりますね、退魔巫女」

「姿を見せなさい！」

「いいでしょう」

カーペットを踏む靴の音。暗闇から姿を見せたのは、スーツ姿の中年男性だった。背筋がピンと伸びており、聡明な顔つきをしている。

「あなたは、公園の……！」

そのスーツには見覚えがある。公園からここまで、私が尾行してきた男だ。

「期待以上の働きでした、退魔巫女。君をここまで案内した甲斐がありました」

「案内……!? それはどういうこと？」

「最近この界隈で、退魔巫女が活躍しているという話は聞いていましたからね。餓鬼の気配を餌に退魔巫女をおびき寄せ、私を尾行させることでここに案内する。そして、妖魔の親玉である牛鬼を倒させる。すべて私の筋書きのとおりです」

（私にわざと尾行させて、妖魔を倒させた……？）

嘘を言っているようには見えない。私は頭をフル回転させて、状況を推察しようとした。彼は自分の会社が妖魔の巣になっている現状を打開するため、退魔巫女である私を呼び寄せ、妖魔を退治させようとした。そう考えると、一応は話を通る。

しかし、目的は理解できても、その手段が解せない。私が退魔巫女だと知っていたのなら、素直に協力を求めればいいのだ。それをわざわざ尾行させるなんて、不自然である。それにこの男は、公園で餓鬼と会話していた。私をおびき寄せる餌として餓鬼を使うなど、普通の人間にできることではない。

極めつけは、さっきの攻撃だ。今は鞭のようなものを手にしていないが、明らかに私を狙ったものだった。

簡単に気を許していい相手ではない。

「あなたは何者？ どうして妖魔のことを知っているの？」

「まだ名乗っていませんでしたね。私の名は日下部健司くさかべけんじ。この会社、グロードの代表取締役社長です」

日下部は両手を左右に広げて深々とお辞儀をした。もちろん私はお辞儀を返したりなどはない。警戒しながら彼の様子をうかがう。

やがて日下部は顔を上げた。その表情は営業スマイルで覆われており、感情が読めない。

「私が妖魔のことを知っているのは……私自身が妖魔だからですよ」

「……！ そんなはずがない。だって……」

目の前の男からは、妖魔の気配を感じない。それ以前に、どう見ても外見は普通の人間だ。これほどまでに人間に擬態し、自由に言語を操る妖魔など、いるはずがない。

「もちろん普通の妖魔ではありません。私は元人間。妖魔と融合し、妖魔の力を得た、いわば半妖はんよう、といったところでしょうか」

「半妖……妖魔と人間が融合するなんて、そんなこと——」

「できるはずがない？ 残念ながら、事実ですよ。これを見れば分かります」

日下部がそう言うと、彼の背中が蠢ぎ、複数の触手が生えた。

「な……！」

私は言葉を失う。背中から濃い緑色の触手を生やす人間などいない。彼が妖魔と融合したことで、あのような体になってしまったというのか。

「さきほどあなたを攻撃したのは、これです」

日下部が言葉を終えると同時に、1本の触手が私に飛来する。ひゅん、と耳元の空気が震えた。

「くっ……!!」

私は身を屈めてそれを回避する。

触手の動きは素早い。間合いが測れないので、後退して回避するのは危険だ。今は1本だけの攻撃だが、背中に生えた全ての触手が一度に襲ってきたら、回避できないかもしれない。

「あなたが妖魔の仲間なら、どうして私に牛鬼を倒させたの？」

「それはもちろん、妖魔だったからですよ」

「妖魔……？」

「あの妖魔、上位種のくせに、人間とうまく距離を保っていいこう、などという軟弱な思想の持ち主でしてね。餓鬼共の活動に制限をかけていたのです。そんな奴をリーダーにしていけないと常々思っていました。私の力で倒せる相手ではない。そこであなたに退治してもらうことにしたのです」

方針の不一致による仲間割れということだろうか。私があの牛鬼を倒したのは、この男の策略によるものらしい。

「牛鬼が倒れたことで序列が繰り上がり、このビルにいる妖魔はすべて、私の配下となりました。私の意のままに動かせる駒になったのですよ」

「妖魔を従えて、どうするつもり？ あなたは元人間でしょ？ どうして妖魔なんかと融合したの？」

「それはもちろん、力を得るためです」

日下部は考えることなく即答した。

「強大な力を得ること。そしてその力でこの世界を支配すること。それが私の望みです。まずは配下の餓鬼共を使って、この街を混乱に陥れることから始めます」

「本気、なの……？」

「本気ですとも」

言葉と同様に、その真剣な視線からも、彼の本気さが伝わってきた。初めて伝わってくる彼の感情、それは「狂気」だった。

「狂ってる……」

「よく言われます」

日下部の触手がしなる。同時に私は神符に神気を込めた。

「あなたが心まで妖魔になったというのなら、私が倒します！」

日下部は牛鬼を倒すことができずに私を呼んだと言っていた。つまり彼の力は、先ほど私が倒した牛鬼以下ということになる。ならば、問題なく倒せるはずだ。

「はああっ！」

8枚の神符が放たれ、彼の体に付着する。しかし、

「効きませんね、こんなものは」

「……？」

神符が触れても、彼の肉体にダメージがあるようには見えなかった。妖魔であれば、神

気に触れるだけでその存在が消えかねないというのに、日下部は平気な顔をしている。私は連続で打ちこまれた触手を紙一重で回避しながら、日下部の側面に回った。

「ならばこれでっ！ 神槍、軻遇突智！」

私は体内の神気を集め、頭上に火の槍を生成する。

「喰らいなさい！」

勢いよく腕を振り下ろし、槍を射出。次の瞬間、軻遇突智は日下部の胴体を貫いていた。

日下部は言葉を発することなく、その場に仰向けで倒れる。

「……あなたの野望は、これでおしまいよ」

6

（一体何だったのよ、こいつは……）

人間と妖魔の融合。全く前例のないケースだ。

そもそも人間と妖魔の融合とはどのように行われるのだろうか。日下部を倒してしまっただけ、それを聞き出すことはできないが、今後同じ事例が発生しないとも限らない。里にしっかりと報告し、対策を講じる必要がある。

だが、彼の悪巧みもこれで潰えた。あとは先ほどの予定とおり、このビルに残った餓鬼達を倒していけばいい。

私は日下部に近寄り、軻遇突智の神気を回収する。

しかし、私は気付いた。彼の体が塵へと変わっていないことに。

「捕まえました」

「G」

左右から触手が飛来し、私の両腕と胴体を束ねるように巻き付いた。腕で触手をガードしようとしたため、両腕で両胸を挟むような状態になる。

「ぐっ……どうして……！」

「どうして生きているのか？ それが疑問なのですね？」

私の目の前で、倒れていた日下部が起き上がる。その胴体には、傷らしきものはない。

（軻遇突智が貫いたはずなのに、どうして無傷なの……？）

「分かりませんか？ 私には退魔巫女の力は効かないのです。何しろ私の半分は人間ののですから」

「……神気が、効かない!?」

認めるには抵抗があった。しかし、神符を貼られても動じず、軻遇突智に貫かれても傷一つなく、さらには、私の体を経う神気に触れても触手がダメージを受けない。

（半妖だから……半分人間の存在には、退魔巫女の神気が効かないの……？）

確かにこの男からは、妖魔特有の嫌な気配を感じない。それも半妖の特性なのだ。

神気が効かず、妖魔の気配がない。しかし、妖魔の力を使うことができる。半妖とは、私のこれまでの常識を覆す、新たな存在だった。

「ぐっ、あ……っ、このっ、放せ、っ……くうう……」

ぎりぎり、彼の触手がさらに強く私を締め付ける。

（力が強い……私の力では、引き剥がせない……！）

「さて、退魔巫女。牛鬼がいなくなった今、あなたはもう、用済みです」

「私を、殺すの……？」

「さて、どうしましょうか」

日下部は口の端を吊り上げて笑った。妖魔と融合したためか、やけに長い舌が口の中に見える。

「殺してもいいのですが、あなたには牛鬼を倒してもらったお礼をしなければいけませんね」

「お礼……？」

「死ぬ前に、女の快楽をその身に教えてあげましょう」

「何を言って、ひいろうっ!?」

私に巻き付いている触手が、すると蠢き始めた。触手は表面からヌルヌルの粘液を分泌させ、私に擦りつけてくる。

その感触のおぞましさに、私は身を震わせた。

「何を、するつもり……？ ひうっ……！ 気持ち悪い……放しなさい！ くっ……放して……！」

触手の粘液が巫女装束の白衣や、袴に染み込んでいく。瞬く間に、私の全身は触手の粘液まみれになっていた。薄暗い室内に、粘液を塗られた私の身体が、怪しく光っている。

「聞けば退魔巫女というのは、処女を喪失することをきかっけとして、性的絶頂を迎えるたびに、神の力、神気と言いましたが、それを失うようになるのですよね？ そのため、その身体はずっと快楽を知らないままとか。せっかく女に生まれたというのに、性の悦びを知らないまま死ぬのは可哀そうです」

「勝手な、ことをっ……！ 私は、退魔巫女の使命を誇りに、っ、思っているのっ……！ 知ったように、可哀そうとか、言わないでっ……んっ、くうっ……！」

「快楽を知らないことが可哀そうなことかどうか、これからその身体で判断してください」

「ひっ……な、何を……んあうっ……そこ、胸……いやっ……！」

触手が私の胸元から白衣の中に入り込んできた。白衣の胸元が左右に押し広げられ、乳房が露出する。そして触手の先端が勢よく乳房に巻き付き、くにくくと揉みしだき始めた。

「ああっ!? このっ……やめろお……私の胸、触る、なあ……！」

「どうですか？ 胸を揉まれた感想は。気持ちいいですか」

「ふざけ、ないでっ……！ 気持ちいいわけ、ない……！ こんな、気持ち悪いだけに、決まっているでしょ……！」

「そうですか。では、こっちはどうです？」

別の触手が私の脚の間に入り、その表面で股間を擦り始めた。

「んひっ……そこはっ……っ、なんてとこ、撫でるのよ……」

袴を押し上げながら、触手はショーツ越しに私の秘所を撫でる。粘液が純白のショーツに染み込んでいき、私の淫唇までもを濡らしていった。

「気持ち悪いっ……こんなこと、止めろっ……!」

「ほう。気持ちよくないと、感じてはいないと、そう言いたいのですか？」

「当たり前じゃない! こんな触手なんかで、気持ちよくなるわけないでしょ!」

それは本心だった。触手に胸や股間を撫でられ、おそましさが身を包んでいる。いくら性感帯を触られても、このような状況で感じるわけがなかった。

「そうですか。では、これをあげましょう」

それは突然のことだった。日下部の顔が私の眼前に迫ったかと思うと、彼の唇が私の唇に押し当てられた。

「んっ!? んむううう!? んんっ!! んんんっ!!」

(なにこれ……! 私、こいつに、キスされちゃってる……!?)

反射的に逃れようと、私はもがいた。だが、全身を触手に絡め捕られている今、彼の顔を引き剥がすことができない。

(そんな、ひどい……私、ファーストキスだったのに……それが、こんな男に……!)
悔しさに瞳から涙が溢れた。いつか退魔巫女を引退した時に、好きな人がいたら、その人に捧げようと思っていたファーストキスが、まさか半分妖魔の男に奪われるなんて。

「んっ!! んむうううっ!! んん!! んぐううう!!」

私が嫌がっていることは明らかなのに、日下部は私から唇を離さない。それどころか、私の歯を割って、長い舌を口の中に押し込んできた。

「ふぎゅっ!! ん——!! んじゅむうううっ!!」

(いやっ、なにこれ……舌が、私の口の中に、入ってきて……ダメ、そんな気持ち悪い物で私の中を、ぐちゃぐちゃにしないでっ……!)

その舌は大量の液体を分泌させながら、口の奥へと進んでいく。半妖の唾液など、飲みたくはない。しかし、彼の舌は巧みに喉の奥にまで届き、その液体を私の体内へと流し込んだ。

(いやあ……気持ち悪い……! そんなもの、飲ませないでっ……!)

やがて、かなりの量の液体が流し込まれた後、日下部の唇は私から離れる。

「がっ、く……ごほっ、ごほっ……!」

「たっぷり飲みましたね。さて、身体の方に変化はあるでしょうか？」

「……? 何を言ってる——んっ!? う……あ……なにこれ……急に、身体が熱く……うああああっ!」

突然私の身体が、燃えるように熱くなった。まるで体の内部に、火を付けられたような、そんな感覚だった。と、同時に、胸や股間といった、触手に撫でられている部分が、甘く、切ないような疼きを発し始める。

「これは……一体、どう……! あなた、私に、何を飲ませたの……?」

「私と融合した妖魔の能力の1つでね、体内で強力な媚薬を精製することができるのですよ。君に飲ませたのはそれです。さしずめ淫液とでも呼びましようか」

「媚薬……? 淫液……? それって……」

「身体を強制的に発情させる薬ですよ。私の淫液を飲んだら、どんな不感症の女でも、たちまち全身で快楽を貪る雌に変わります」

私の身体が熱いのは、その淫液で強制的に発情させられたせいなのだ。その証拠に、触

「くっ……快樂を教えるとか言つて、いやらしい薬で強制的に感じさせるなんて……こんな卑怯よっ!」

「そんなことを言っても無駄ですよ。目的のためなら手段は選ばない。それが私なのです」
「くううつ……こんなことでつ……たとえ葉を使われたって、私は……んひいいいひいいい
ひい。」

突然胸に巻きついていた触手が激しく蠢き、その先端が乳首に巻きついた。にゅりとした感触で乳首を締め上げられると、今まで経験したことのない未知の感覚——快感が溢れる。

（これはっ……乳首、つねられて……私、気持ちよくなってるの……？）

触手は私の乳首や乳房に巻き付きながら、ぐいぐいと引つ張っている。そのたびに胸全体に快感が生じ、身体の疼きを満たしていく。

「くう、つ、んあああ……こんなの、私、知らない……んあうつ……ダメえ……そんな
に胸、弄ったら、ダメええ……」

「そうですか、そんなに胸が気持ちいいですか」

「んっ、あううう……これは、媚薬のせい、だからっ……普通ならこんなことで、感じた
りなんて、しないんだからっ……!」

「ほう。つまり、感じていることは認めるのですね」

「……つ、く、ううう……んひつ、ああ、つあ、んんつ……こんなの、全然、気持ちよく
 なんかっ……ひうううっ……」

「今さら誤魔化しても遅いですよ。しかし、意地を張るのなら、もっと素直にさせてあげましょう」

「今後は、何を……いやっ、そこは——つきいいいいいいっ!!」

日下部は私のショーツを引っ張り、横にずらすと、剥き出しになった私の淫唇の中に指を二本、躊躇なく捻じ込んだ。

「やめ……っ……んあああああつ！ 抜いてっ、それ、抜いてえええええつ！！」

突然の衝撃に、私は首を振りながら叫んだ。

乾いた彼の指が、すぶすぶと私の膣の中へと沈んでいく。太い男の指を簡単に受け入れるほど、私の膣内は濡れてしまっていた。

初めての膣内への侵入物に、痛みを感じるところか、私は快感を覚えている。指先がこりこりと膣壁を擦ると、下腹部がきゅうっと収縮し、甘い果汁のような快感が溢れ、全身に沁み渡っていく。

（こんな……嘘つ、こんな男に、私の大事なところ、触られて……どうして私、感じちゃうの……？）

「んああああつ……く、うう……んいっ！　っあ、ああああううう……んあ、あつ、ああ……いやああ……！！　私の中、触らないでっ……そんな、激しくかきまわしちゃ、ダメええええつ！！」

じゅいじゅいじゅい

日下部の指が激しく私の膣内を出入りし、そのたびにいやらしい水音が響いた。私の膣内から溢れる愛液と、彼の指が絡み合う音だ。淫液によって発情させられた私の身体は、

既に大量の愛液を分泌しており、指の出入りをスムーズにできてしまっている。

指が膣内を出入りすると、弾けるほどの快感が溢れ、脳に気持ちいいという感覚を送る。それが連続して行われることで、私から正常な思考を奪いつつあった。

「んあう、っ、くああああ……！ ダメ……こんなの……うううう……何か、来てる……っ……何か知らないのが、くるうう……」

胸の奥から込み上げてくる切ない疼きに快感が集まり、抑えきれないほどに膨らんできている。このまま快感が蓄積したら、弾けてしまいそうだ。

そしてそれが弾けた時、私の身に何が起こるのか分からず、私は恐怖した。この先の領域に踏み込んでしまったら、もう戻れない。そんな確信めいた予感が脳裏によぎる。

「いやああああっ！ もう、やめろおおおおっ！！ これ以上、私の中、くちゅくちゅするなあ……んあっ、あ……んくうううっ！！ 胸も、乳首……ダメええええっ！！ つねられると、ふああってなるうう……んっ、んんっ、ううああああっ！！」

「絶頂しそうですね？ いいのですよ、遠慮することはありません」

「ぜっ、ちよう……？ んあうっ……いやっ、そんなの……したくないっ……！ もう指動かすの、やめ……っあああああっ！！ ぐりぐり、激し、ひいいいっ！！」

（こんなの、ダメ……気持ちよすぎて、もう、我慢、できないっ……！ 絶頂しちゃう……私、退魔巫女なのに……気持ちよくなるの覚えちゃ、ダメなのに……イカされる……！ 妖魔に触られて、イカされちゃうっ……！）

「あああうううっ……ダメっ、ダメえ、ダメええええっ！！ くるっ！ 気持ちいの弾けて、きちゃううううっ！！ あ！ ああああっ！！ っ、あああああああっ！！ もっダメっ、イク！ イくっ、イ……きゅううううううううっ！！」

身体の中で快感が弾け、全身が「気持ちいい」で満たされた。背筋が大きく跳ね、肩がびくびくと震える。

（これが「イク」ってことなの……？ 全身が浮いているみたいになって、何も考えられなくなっ……こんなに、気持ちいいなんて……）

「あう、っ……くうう……んあっ、はあ、はあ……く……このお……」

「どうしましたか？ そんなに反抗的な目をして。気持ちよくなって絶頂したのですから、もっと嬉しそうな顔をしたらどうです？」

「だ、誰が……！」

「ふむ。ならば素直になるまで、もっと絶頂させてみますか」

「ひっ……んいいいいっ！！」

触手と指の動きが再開された。先ほどと同様、いや、それ以上に激しく、私の胸を、膣内を責め立てる。

じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ！

再びいやらしい水音が響く。

「いやああ……んぎっ、はううううう……こんな、ことでっ……気持ちよくなんて……んいいいいっ……あっ、あ……ダメええええ……激しくしたらダメええええっ！！」

私は拘束から抜け出そうと力一杯もがいたが、ギチギチと締め上げてくる触手は少しも緩くなる気配がない。このまま直立の状態で絶え間なく快感を与え続けられたら、再び絶頂を迎えさせられてしまう。

（いつ、嫌だ……こんな奴の手で、2回もイきたくない……耐えないと……耐えないと、いけないのに……私の身体、感じちゃうっ……!）

飲まされた媚薬により、私の身体は熱く、火照ったままになっていた。胸や膣への刺激が燃料となり、体内の炎がずっと燃焼し続ける。全身が汗でびっしょりと濡れ、触手の粘液と混ざり合ってドロドロに巫女装束を濡らした。

「んっ、あ、ああ……うううう……いやああ……もうイきたくないのに……また、きちゃうう……ああ、イクっ……うっ、うあああ……」

（もう耐えられない……私、まだ、達しちゃうっ……!）

「イクううううっ!! イくっ……うああああああああああっ!!」

びくん、びくん。触手に拘束された身体が大きく震えた。

下腹部で溢れた快感が、脳天と足の先まで一気に駆け抜け、強烈な浮遊感をもたらす。頭が真っ白になった。

「ぐ……あっ、かはっ、はあ……っぐ、あ、ああ……はあ、はあ……」

やがて絶頂の波が過ぎ去る。ぼんやりとした視界には、満足そうな日下部の笑みがあつた。

「そうですか、そうですか。そんなに気持ちよかったですか」

「あ……ああ、っ、うう……」

反論しなかったが、そんな余裕はなかった。今の私は、ただ呼吸を整えることしかできない。

「やはり処女の状態でいくら絶頂しても、神気を失わせることはできないようですね」

日下部は私を観察するように視線を動かしている。まるで実験材料にされているような、そんな気分になった。

「では、処女を奪ってみましょう」

「……え？」

その言葉の意味を理解できないでいる私をよそに、日下部は近くにあるソファに腰掛ける。そして触手を操作し、私を膝の上に座らせた。

「っ、うう……？ な、何を……」

触手が私の脚を左右に大きく広げる。私は日下部の膝の上ではしたなく両脚を広げさせられた。

「今から君の、処女をいただきますよ」

と言いつつ、日下部はストラックスのファスナーを下げる。その直後、ファスナーの内側から、そそり立つ1本の肉棒が姿を見せた。

「ひっ……!？」

私は息をのんだ。表面に血管の浮かんた、グロテスクな一物。男の股間から生えるそれは、男性器、ペニスだった。

（これが、男の人の、おちんちん……?）

はじめて見るその物体から、私は目が離せなかった。あれが女性器、膣の中に入るとは、とても思えない。想像しただけで、恐怖で体が震える。

日下部は先ほど、処女をいただく、と言った。そして私を膝の上に載せ、ペニスを露出させている。これは、つまり――

（私の中に、それを、入れるつもりなの……？）

ようやくその結論に至った時、私の頭から血の気が引いた。

「い、嫌よ……そんなこと、絶対に嫌ああっ！」

「今さら暴れても無駄ですよ。諦めてください」

「っ、そんな、ダメだからっ……！ 私は退魔巫女なの！ 今ここで男と交わったら、絶頂すると神気をなくす身体になっちゃう！ そうなったらもう、戦えなくなるっ！」

「いいですね、その必死な表情。女性の初めてを奪うだけでも興奮ものなのですが、退魔巫女の処女となれば、意味合いが全く違います。使命のために今まで守り続けていたものが理不尽にも奪われる。ああ、とても甘美です。非常に滾ります」

日下部の言葉に呼応するかのように、股間のペニスが脈動している。べちべちと、ペニスの背が私のお腹に触れた。

「いっ、やあああああっ！ 気持ち悪いの、近付けないでっ！」

「今のうちによく見ておいてください。これが今から、あなたの膣中に入るのですから」
「ひっ、い、いや……やめて……お願いよ……私はまだ、退魔巫女として、やるべきことが、いっぱいあるの……だからお願い、やめて……！」

私の懇願が聞こえているはずなのに、日下部は私の腰を掴み、ぐいっと持ち上げる。ペニスの先端が、私の淫唇に触れた。

「お願いだからっ……入れないで……ダメえええっ……お願い、やめてよおおっ！！ あっ、ダメっ！ ダメええええっ！！ ダメだからっ！！ やめてええええええっ！！」

私は力の限り叫んだ。だが、日下部は無慈悲にも、腰を持つ手の力を緩める。

「さあ、悲鳴を聞かせてください」

支えを失った私の腰が、まっすぐに落下した。

「うぎっ、あ、ああああ、あああああああああああっ！！」

プチプチプチ！！

私の膣が、日下部のペニスを根元まで飲み込んだ。勢いよく何かが弾けたような感触とともに、激痛が襲う。

「ひぎいああああああっ！！ いっ、痛い痛い痛い！！ お腹、裂ける——うあああああああっ！！」

下腹部が痺れるように痛い。ペニスによって身を引き裂かれたような、そんな衝撃が体を縦に貫き、側頭部がずきずきと痛んだ。

（これが、初めての時の痛み……私、処女じゃなくなっちゃったんだ……）

目からは大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。それが痛みによるものなのか、それとも処女を失った悲しみによるものなのか、私には分からない。

（私は、退魔巫女として生きなければならなかったのに……これまでずっと、そのために生きてきたのに……それなのに……）

「どうです？ 処女を失った感想は」

「くうううっ！」

日下部の言葉に、大きな怒りがこみ上げる。

両手さえ自由なら、思いっきり殴りつけているところなのに、それすらもできない。触手に拘束されて身動きのできない私には、ただこの痛みに耐えることしか許されなかった。

「よくも……こんな仕打ちを……退魔巫女の処女を、奪うなんて、ひどすぎるっ……」
 「そうは言いますが、まだあなたは処女を失っただけです。神気を失ったわけじゃない」
 「えっ……？」

「処女を失うと、その後絶頂するたびに少しずつ神気を失う。そうでしたよね。ですから、この後絶頂さえしなければ、神気を失うことはない。絶頂しなければ、あなたはまだ退魔巫女のままです」

「確かに、そうだけど、っ……」

「それでは、絶頂しないように耐えてくださいよ」

そう言い終わるより前に、日下部の手が私の腰を持ち上げた。すすず、と膣壁を擦りながらペニスが引き抜かれていく。

「うっ、ああああああ、痛いっ！ ひざいいいいいっ!!」

最後まで抜けると思った瞬間、日下部は私の腰を引き下ろす。再びペニスが奥まで挿入された。こっん、と、ペニスの先端が膣の奥を叩く。

「ぎっ、があああああっ!! やめてっ！ これ、抜いてええええっ!!」

絶頂を我慢するとか、そういう段階の話ではなかった。全身は激痛に支配され、快感は少しもない。

「痛いですか？ それはいけませんね」

私の乳房に絡みついていた触手が激しく蠢く。

「ひいっ！ や……揉む、なあ……きいっ……乳首、触るなあ……!!」

触手は私の両胸を揉みしだきながら、時折先端で乳首を弾き、刺激を与えてきた。

きゅん、と、胸の奥に疼きが生まれ、それが快感に変わる。すると、私の下腹部にも疼きが生じ、じゅん、と、膣内に愛液が溢れた。

「あ……」

じゅぶっ！

突き入れられたペニスを、私の愛液が包み込む。甘い水音と同時に、私の膣内に巻き起こったのは、まぎれもなく快感だった。

（なに、これ……私、胸を揉まれて、気持ちよくなって……それで、お腹も気持ちよくなってる……？）

先ほどまで全身を襲っていた激痛は徐々に薄れていき、代わりにペニスが膣壁を擦ることによる快感が生じていた。その快感は、ペニスが膣内を往復するたびに大きくなっていく。

「君の身体には淫液が残っていますから、きっかけさえ与えれば、このとおりです」

「いやああ、こんなの……私、犯されてるのに……初めてなのに……感じてるっ……ダメなのにつ、気持ちいの、溢れてくるう……!!」

じゅぶっ！ じゅぶっ！ じゅぶっ！

触手の動きが少しずつ早くなっていく。私の腰の上下運動が激しくなるほど、ペニスが膣内を行き来する速度が上がり、その分生み出される快感が増えてしまう。

（こんなの、やだよ……妖魔に犯されて、感じちゃうなんて、いやああ……絶頂しちゃいけないのに、このままどんどん気持ちよくなったら……そんなの、ダメなんだからあ……!!）

感じさせられるくらいなら、まだ痛いままの方がよかった。処女を失った今、絶頂すれば神気を失ってしまう。なんとしても、それだけは避けなければならぬ。

私は必死で歯を食いしばって、湧き上がる快感を抑え込もうとした。

「うぐっ、ひぐっ……んっ、あ、あぐっ……うあああううっ……こんな、ことでっ、私は……私はっ……！ 感じたりなんかあっ……！ んあああああっ！」

退魔巫女の使命。これまでに行ってきた修練の数々。私を信じて送り出してくれた姉の顔。

それらを想い浮かべながら、沸き上がる快感を少しでも鎮めようと努めた。

（私は、妖魔には屈しない……屈してなるもんかっ……！）

「くっ、ううう、激しひっ……うああ……そんな、奥まで、突くなあ……！ っ、くうう、んあああうっ……私は、負けない……退魔巫女は、妖魔になんて、負けない、っあああ……負けないんだからっ……！」

「なかなか頑張りますね。では、これでどうでしょう」

1本の触手が、私の下腹部へと向かう。ペニスが激しく出入りしている結合部の上方、淫唇の割れ目の先端にある突起に、きゅるりと巻き付いた。

「んひっ!? んんっ！ んああああああっ!!」

私は目を見開いて叫び声をあげた。くにくにと、触手の先端が小さな突起を掴ると、直接脳を揺さぶられるような衝撃と共に、刺すように強烈な快感が背中を奔る。

（なによ、これ……こんな強い刺激を与えられたら、抵抗できなくなるっ……!）

「クリトリスを触られるのは初めてでしょう？ さあ、どこまで耐えられるでしょうか」「クリト、リス……？」

新たに触手が刺激している部位のことだろうか。自分の身体のことなのに、軽く触られただけでこれほどの刺激を生み出す場所のことを知らない。

クリトリスへの刺激が生み出す快感は、私の耐えようとする意思力を奪うどころか、胸や膣への快感を何倍にも引き上げているように思えた。

（これは、いけないっ……こんなの続けられたら、私……私っ……!）

「どうですか？ そろそろ絶頂が近いのでは？」

「くっ、ううう、うううううっ……！ 私は、イかない……イってたまる、もんかっ、っ、あ、あううう……んあっ、あ、ダメっ……んんんっ……」

日下部の言うとおり、先ほど2度味わった絶頂の感覚が、すぐそこまで迫っていることを感じていた。

（ダメえええ……流されては、いけないっ……！ 絶頂してしまったら、神気が……うあっ、でも、でも……気持ち、いい……気持ちいいよお……ああ、気持ちいいのを、こまかせないっ……!）

「あっ、あああああっ……もうやめてえええええっ！ 限界だからっ……私、イっちゃいそうだから……もうじゅぼじゅぼするのやめてえええええっ！」

私は髪を振り乱して叫ぶ。だが、触手や指の動きは止まらない。それどころか、私の限界が近いと知るや、ラストスパートとばかりにさらに動きを激しくしてきた。

「うああああああっ!! んああっ、ダメ……イきたくないっ、イきたくないのおおおっ!! もういやああああああっ!! 気持ちよくするのダメえええええっ!!」

胸を揉む触手の動きは、激しくとも決して乱暴ではなく、着実に快感だけを与え続けてくる。

クリトリスへの刺激は相変わらず強く、刺すような快感が私の身体の中をぐちゃぐちゃにかき回していく。

そして、膣内。ペニスが激しく行き来するそこは、一突きごとに私の肉を抉り、ぞくぞくとした快感を生み出し、蓄積させていく。

(もうダメっ、もう、耐えられないっ……気持ち良すぎて、気が狂ってしまいそう……!)

快感が弾けないように、精神力だけで耐えていたが、それも限界だった。

絶頂が、来る――

「んんんんんん！ あっ、あ——っ!! ダメ……くるっ……私、私……イクっ!!

イクっ!! イくううううううう!! イっちゃうううううううう!! ああああ

あああああああっ!!!」

(あ——イっちゃってる……私、イっちゃってるよね……)

抑制されていた快感が一気に溢れ、全身を包み、五感を全て奪い去った。

真っ白な世界。ただそこに私の意識だけがあり、気持ちいいという感覚が次々と多方向から流れ、心の渇きを満たしていく。

そんな時間がどれくらい続いただろうか。私の意識が、肉体へと戻ってくる。

「っはあ……っ、がああああっ! かはっ、く、んんんっ……!」

絶頂の余韻。脱力感。圧倒的な心地よさが脳内を埋め尽くす。

だが、同時に私は感じた。私の体内から、力の源が一部、抜け落ちていくことに。

(ああ……私の神気が、消えていく……!)

「ううう……あぐっ、イっちゃった……イっちゃダメだったのに、イっちゃったよお……

うううう……」

「ふむ。一度の絶頂で失われる神気は、ごく一部そうですね」

日下部は冷静に私を観察していた。彼への憎しみは強かったが、今は大切な神気を失ったことへの悲しみの方が大きい。

「う、うう……どうして、こんなことに……」

「絶望的な表情、そぞりますね。でも、休んでいる暇はないですよ」

日下部の手が私の腰を強く掴みなおし、私の膣内にペニスを出入りさせる動きを再開させた。

「ひぐっ……や、あああああっ!! もう動いちゃいやあああああっ!!」

「あなたは絶頂したかもしれませんが、私はまだ絶頂していません。私が満足するまでは、付き合ってもらいます」

「うあああああっ!! んあっ! 激しく動かれたら、また気持ちよくなっちゃうううう

うっ!! もういやあああああっ!! やめてっ、もう許してえええええっ!!」

じゅちゅっ! じゅちゅっ! じゅちゅっ!

私の腰が日下部の腰に打ちつけられ、そのたびにペニスが体内を抉り、快感を生み出す。触手による胸やクリトリスへの責めも再開され、私は激しく絶頂した直後だというのに、快感に身を震わせながら淫らな声を出していた。

「あうっ、んああっ……! ダメっ……! また気持ちよくなっちゃ、ダメなのにつ……

激しく突かれたら、あっ、あああっ！ うあううっ……気持ちいの、昇ってくるっ……いやああ……もう突かないでえ……お願いだからあ……」

「私が絶頂するまでに、君は何回絶頂するのしょうね？」

「ううああああっ！！ ダメえっ！！ 気持ちいの、来てりゅからああっ！！ また、いつちゃうからあああっ！！」

先ほど激しく絶頂したせいか、私の身体はより感じやすくなっており、かつ、絶頂に必要な快感が大幅に少なくなっているような感じがする。このまま責められたら、ろくな抵抗もできずに、また絶頂を迎えてしまう。

（私がいくたびに、神気がなくなってしまう……もうこれ以上、イクわけにはいかない……だけど、もう私、快感に耐えられなくなってる……いやあ、早く、終わってえ……）

しかし、私の願いは虚しく、日下部のペニスは硬度を維持し、私の奥を突き上げ続けた。そして、再び限界の時間が訪れる。

「あう！ んあああっ！！ あっ、また……イっちゃううう！！ 突かないでっ！ これ以上突かれたら、また、ああっ!? あ、うあああああっ！！ ダメっ、イクっ、んんっ——あああああああっ！！ イっくううううううううっ！！」

絶頂と共に快感が全身を走り抜け、脚がぐくぐと痙攣した。また目の前が真っ白になり、意識が快感に包まれた幸せな時間が訪れる。

同時に体から神気が失われるのを感じた。

「ひくっ……んっ、あ……うあ……くひゅう……んんっ……あ、ああ……」

（また、神気を失っちゃった……イっちゃダメなのに、身体中を敏感にされて、一斉に責められたら……こんなの、耐えられないよお……）

「っあ、はあ……んいっ!? ああっ！ そんな、まだ動いて……んひいっ!!」

私が絶頂しても、日下部の触手は動きを止めなかった。その勢いを少しも弱めることなく、私の胸やクリトリスを責め続ける。

「いやっ……いやあああああっ！！ もう動かないでっ！！ また気持ちよくされたら、私、すぐにイっちゃうからあああっ！！」

日下部は答えない。激しく私の身体を上下に揺さぶり続けている。

じゅぶっ！ じゅぶっ！ じゅぶぐっ！

「うっ、あ……あ……あああっ！ くううううっ……んあああっ！！ ダメえっ、ダメ、ダメえええええっ！！ もうイかせないでっ！ あ、やだ……やだあああああっ！！

あっ！！ ああああっ！ イぐううっ！！ イっちゃっ！！ イく！ イ……ぎゅうううううううっ！！」

びくびく、びくん！

体内で快感が暴れ、身体が激しく震えた。

処女でなくなってから3度目の絶頂。失われる神気。

「どうですか？ これまで積み重ねてきたものがあっさりと失われていくのは。悔しいですか？」

「くっ、ああああ……っく、はあ……うう、どうして、こんなひどい、くっ……ああ……もう、やめて……んひっ！ ああっ！！ んあああああっ！！」

凌辱は続く。深く、深く、ペニスが突き入れられ、お腹の奥に衝撃が奔る。快感の過剰

供給に、頭の中がビリビリと痺れる。

「お願い、だからあ……もう、やめてえ……！ これ以上神気を失ったら、私、戦えなくなっちゃう……！ もう、許してよね……！」

「絶望的で、官能的で、とてもいい表情ですよ、退魔巫女。もっとその顔を見ていたいところですが、どうやら私の方が限界のようです」

限界、それは終わりということだろうか。

「このまま中に射精してあげましょう」

「……！！ ひっ……！！」

射精。男がペニスから精液を射出する行為。彼の宣言は、私の中に子種をばらまくというものだ。

「ダメええっ！ そんなの、いやあああああぁあぁっ！ 膣中に出すのは……それだけは、やめてええええええええええっ！！」

「神気が残ってれば、汚れた妖魔の精子で妊娠することはないでしょうが……そういえば私は半妖でしたね。さて、半妖の精子で退魔巫女は妊娠するのか、試してみましよう」

「いやあああああぁあぁあぁっ！！」

「それでは、ラストスパートです。私が絶頂するまで、絶頂せずに耐えられるといいですね」

じゅぶぐっ！ じゅぶぐっ！ じゅぶぐっ！

日下部は今まで以上に高く、私を持ち上げた。ペニスが抜けるギリギリのところまで持ち上げ、一気に引き落とす。

「うっ、あああああぁあぁあぁっ！！」

ペニスに膣の入口から根元までを擦られ、激しい快感に膣全体が痙攣するかのようだった。私の身体は今まで以上の速さで下下し、視界が激しく揺れる。

「くっ、あっ、ううううううっ……んっ、くあああぁあぁあぁっ……あっ、あああぁあぁっ！ んあああぁあぁっ！！」

（ダメ……！ イっちゃダメ……！！ こいつがもうすぐ絶頂するというのなら、それまでイっちゃダメなんだから……！！ これ以上、神気を失わないためにも、あと少し、耐えないと……！！）

だが、日下部の責めは、どんどん激しくなっていく。乳房を揉みしだく触手や、クリトリスに絡みつく触手がブルブルと震え、さらに刺激の強さが増した。

「ふあああああぁあぁあぁっ！！ それダメえ……！！ もっと気持ちよくしちゃ、ダメだからあああああぁあぁあぁっ！！」

（この男、まだ絶頂しないの……？ 私もう、限界だよお……！！ 気持ちよくなりすぎて、もう、何も考えられない……！ イっちゃう……！ 私まだきちゃううううう……！！）

「ダメええええええええええっ！！ いやあああああぁあぁあぁあぁっ！！ イくっ、イっちゃうううううううううっ！！」

「おおっ、素晴らしい締め付け！ 出ます！ 出ますよおー！」

「うあああああぁあぁあぁあぁあぁっ！！ イっくううううううううううっ！！」

果てた。
頭が真っ白になった。

次の瞬間、膣の中を、熱湯を流されたような衝撃と熱が襲った。
「……………!? きつ、ひいつ……………いやあああああああつ!!」



（これが、精液……………！これが膣中で出されるってこと!? 熱いつ！ 熱い液体が……………中で、暴れ回ってるっ！）

勢いよく放たれた液体は、私の膣内で渦を巻き、膣壁を抉り取る勢いで流れていく。また、精液の熱により、私の膣内全体が焦がされているようだった。

「うっ、いいいいいいいっ!! まだ、出てりゅうううっ!! 止まって！ 止まってえええええっ!! うあああああああつ!!」

精液が膣内を刺激し、それが快感へと変わる。身を焦がす快感が、私を再び頂へ押し上げようとしていた。

（ダメっ……………精液を出されてイっちゃうなんて、ダメだから……………！ 連続でイって神気を失うなんて、絶対にダメええっ!!）

身を震わせて精液の濁流に耐える私だったが、そこへ、
ぶしゃあああああ!!

「……………」

周囲の触手達が、その先端から、一斉に白濁液を吐き出した。大量の精液が、まるで滝のように私の全身に降り注ぐ。

「あ……………あああああ……………熱ひっ……………！ あ、いや……………こんなの、いやああああああつ!!」

私の肌が、白く染まっていく。膣内だけでなく、私の全身が、汚されてしまった。精液を浴びせられたことで体温が一気に上がり、抑え込めそうだった快感の波が、一気

に膨れ上がった。

「あっ!! ダメっ!! んぎいいいいいい!! イっじゃううううっ!! わだしっ、せいえき出されて……あっ! んああああっ!! イぐう!! イっ——ぐ……あああああああああっ!!!」

それが処女喪失から数えて5度目の絶頂だった。

快感に支配された手足の指が小刻みに痙攣している。

退魔巫女の使命のことも、絶頂に伴う神気の減少のことも、あまりの衝撃に頭からはじき出され、もたらされた快感のことしか考えられない。

ただただ、気持ちいい。その感情だけがある。

「っ……あ、ぐ……く……かはっ、ぐっ……ああ……ん——っああ……」

いつまでも続くかと思われた快感の波が通り過ぎ、次に沸き上がってきたのは、激しい後悔の感情だった。

（イってしまった……ダメだって、分かったのに……連続で……）

体から神気が失われるのを感じ、私は涙した。

今ここにいるのは、気高き百戦錬磨の退魔巫女ではない。妖魔に犯され、全身を白濁に塗りつぶされた、みじめで哀れな小娘だった。

「いい具合でしたよ、退魔巫女」

ずぶぶ。日下部のペニスが私から引き抜かれていく。

「んっ、くあう……」

「白濁と鮮血の混じったこの色、最高ですね。これだから処女を犯すのはやめられない」私の股間から垂れる液体を見ながら、日下部が何かを言っていたが、答える元気はなかった。

「これだけの名器、殺すには惜しいですね。それに5回絶頂しても、まだまだ神気は残っているようです……ふむ。いいことを思いつきました」

日下部の触手が1本、デスクの方に伸び、コードレスの受話器を掴んで戻ってくる。それを手に取った日下部は、どこかへ電話をかけ始めた。

「私だ。君たちに、頼みたいことがある」

そう切り出した日下部の言葉を聞きながら、触手に縛られたままの私は意識を失った。

「……っぶ、うああ……?」

私はお湯をかけられて目を覚ました。体に降り注ぐ無数の水滴。これはシャワーだ。

（私、どうなったの……?）

プラスチックの壁で仕切られた、2メートル四方くらいの狭い空間。壁はタイル張りになっている。どこかのシャワー室のブース内のようなだった。

私はタイル張りの床に、仰向けに寝かされて、巫女装束のままシャワーを浴びせられている。私にシャワーノズルを向けているのは……

「おっ、目が覚めたみたいだよ」
「えっ……？」

狭いシャワー室の中に、男が4人いた。

「ひっ、あなたたち、誰……？」

私は反射的に半身を起こす。

「あれ？ 覚えていないかな。エレベーターホールで助けてくれたでしょ」

「……？」

よく見ると男は4人とも、白衣を着用していた。シャワーが服にからないよう、袖と裾をまくっている。

グロルドのビルに突入した後、餓鬼に襲われていたところを助けた4人だ。だがどうして、彼らが私にシャワーを浴びせているのだろうか。

「あなたたち、これはどういうこと……？ ここは一体……っっ！」

すきん、と、下腹部が痛みを発した。日下部のペニスに蹂躪された膣内が、じゅじゅと痛む。まるでまだ何か異物が挿入されているような錯覚があった。

（私、犯されたんだ……何度もイカされて、神気を失って……）

「大丈夫？ 痛いのか？」

「社長、乱暴に犯したみたいだな」

「まったく、初めての女の子は優しく扱わないといけないのに」

男達は私を気遣うような言葉をかけてくる。

私はこの時、巫女装束がはだけて、乳房やショーツが露出していることに気付いた。慌てて袴の裾を下げ、胸元を隠す。

「あの……これは、どういう状況なんですか……？」

周囲に日下部の姿はない。

私は日下部に凌辱された後、解放されたということだろうか。その後この人達に助けられて、汚れを落としてもらっているということなのか？

「もちろん、君の身体をきれいに行っているんだよ」

全身に付着していた精液や粘液は、シャワーのおかげで全て流れ落ちていく。

「あ、ありがとうございます……」

見知らぬ男性にシャワーを向けられるというのは初めてのことなので、どう対応しているのか困る。

「ここは、どこですか？」

「シャワールームだよ。ビルの中にある設備の1つさ」

周囲には妖魔の気配が数多くある。ここがあのビルの中なのは間違いないだろう。

（今の私では、日下部に勝てない……）

人間と妖魔が融合した存在、半妖。妖魔の戦闘力を持ちながら、神気が効かない彼を倒す手段は思いつかない。ここは一度撤退し、何らかの手立てを講じる必要がある。

そうと決まれば、いつまでもシャワーを浴びているわけにはいかない。日下部に見つかる前に、ここを出なくては。

「あの、シャワーはもういいですから」

「そうかい？ じゃあ、そろそろやめようか」

男性がシャワーの栓を操作すると、私の体を打っていたお湯が止まる。

「皆さんには感謝します。でも、ごめんなさい。今の私には、彼を倒すことはできません。今は私と一緒に、ここから逃げましょう」

私の提案に、なぜか男達は不思議そうに顔を見合わせた。そして、こう返事をする。

「君は一体何を言っているんだい？」

「……えっ？」

「僕たちはここから逃げる必要はないし、君を逃がすつもりもないよ」

「何を言って……きやあっ!?」

不意に4人の男達が私に覆いかぶさってきた。私の両手両足をタイルの床に押し付け、拘束する。

「な、何をするの……!?!」

「社長命令でね。君を捕まえておくように言われているんだ」

その言葉を聞いて、私は自分の耳を疑った。体が急に冷えていくように感じるのは、シャワーを止められたからだけではない。

この男達は、私を助けてくれたわけではなかった。日下部の指示で、私を洗っていたにすぎなかったのだ。

「社長命令って……あいつは妖魔なのよ! そんな奴の命令なんて、聞く必要ない!」

「妖魔ねえ。確かに社長から触手が生えているところを見た時は驚いたけど、それでも俺達のボスだから。給料をもらっている分は、働かなきゃいけない」

「給料……? あいつはこの街を妖魔だらけにしようとしているの! 放っておいたら、大変なことになってしまうのよ!」

私は腕や脚に力を込めたが、大人の男性4人ががりで押さえられていては、逃れられそうになかった。

私の神気の力は、妖魔に効果はあっても、ただの人間には効果がない。人間が相手の場合、私は普通の女の子と同じような抵抗しかできないのだ。

「まあ、俺達も心配になったけど、社長が俺達の安全だけは保障してくれるって言うからさ」

「それに今より給料も増やしてくれるって言うし」

「そうそう。君を調教すれば、特別ボーナスも出るんだ」

調教という物騒な言葉に、私は息を飲む。

「……あなた達は、私に、何をするつもりなの？」

「社長からは、絶頂させ続けろとだけ言われている。それはつまり“玩具”のデータをとれってことさ。いつも通りだよ」

「何を言っているの……?」

いつも通りという言葉に、寒気がした。温厚そうな男だと思っていた4人が、急にどす黒い存在に見えてくる。

「この会社は、表向きは医療機器メーカーだけど、裏ではアダルトグッズの開発もしているんだ」

「まあ、実際一部の医療機器は工口目的で使われているけどね。電マとか」

「時々、借金を抱えた女を買ってきては、その性能を試す実験をしているんだよ」

「やっぱり実際に使ってみないと、気持ちいいのかわからないからさ」
当然のように行われる会話。おぞましいことをされるのではないかという恐怖で、背筋が震える。

「じゃあ……あなた達は、私に、その……いやらしいことをするの……？」

「そうそう。たくさんイかせないと、神気、ってやつが無くなるとか言っていたよな」
「っ……！」

日下部は、私の神気を全て失わせる気なのだ。だから配下の者を使って、私を絶頂させようとしている。

「い、いやあああっ！ そんなの嫌っ!! 放してっ！ 放してよっ!!」

私は力の限りもがいた。だが、男達の手を押し返せない。

私が暴れたことで、白衣がはだけ、乳房が再び露出する。緋袴も徐々にめくれあがっていく。

「この娘の身体、エロくないか……？」

不意に男の一人が呟くように言った。

「そうだな……水に濡れた肌が、とても色っぽいよな」

4人の視線が、私の身体を這うように動いた。私は恥ずかしさで顔を背ける。

「見ないで……見ないでよ……ううう……」

こくり。男の誰かが唾を飲む。

「確か、社長はこいつを絶頂させ続けろと言っただけで、別に“玩具”でイかせないと駄目だなんて言っていなかったよな」

「イカせる方法については、特に指示されてない」

「じゃあ、別に俺達が犯しても、いいよな……？」

「ああ……特に禁止されてない」

「だったら……」

男達の目に、キラリとした欲望の火が灯った。

「い、やあ……やめ——」

男達の手が、一斉に私へと伸びた。

「いやあああああああっ!!」

白衣の襟を掴まれ、大きく下にすり降ろされる。袴がさらに捲りあげられ、横にずらされたままになっている純白のショーツと、淫唇が露わになった。

「やめてっ、お願い、やめっ……んひいいいいっ！」

おもむろに2人の男が顔を近づけ、私の両の乳房にしゃぶりついた。彼らは乳首に吸いつき、舌先でくくにと弄りまわす。

「そんなっ、両方同時に吸っちゃ……んひっ、あ、あううううっ……!!」

両胸への刺激で、身体の奥が、どくん、と脈打つを感じた。日下部に飲まれた淫液の効果がまだ残っている。男達からの刺激が、快感に変えられていた。

「きゅううっ……あ、こんな、ことでっ……んあああああっ！ そんな乳首ばかり舐めちゃダメえええ……」

甘くこそばゆい快感が、胸の奥を締め付ける。身体にむすむすとした痺れが走り、無意識にさらなる快感を求めている私がいた。

そこへさらに、男は追い打ちをかける。

「んっ、あ、あああ!! そこはダメっ! そんなと舐めちゃ、っひいいいんっ!!」
別の男が、衣服が濡れることも厭わずに身を伏せ、私の脚の間に顔を入れると、秘所に舌を這わせたのだ。

さらりとした感触が淫唇を撫でると、おぞましさにぞくぞくと快感が溢れる。さらに舌先がクリトリスを弾き、

「んあああああっ!」

私の腰がぐくぐくと跳ねた。

舌が1つの軟体生物のようににゅるにゅると動き回り、私の淫唇やクリトリスを刺激する。敏感な部分を責められて、強引に快感を引き出されてしまっていた。

舌先がクリトリスを捉えるたびに下腹部がぎゅんと収縮し、膣内に愛液が溢れているのが分かる。

「やっぱり若い身体はいいね。胸の張りが最高だよ」

「おまんこから愛液が溢れてくるよ。そんなに気持ちいいのかい?」

ちゅばちゅばと、3人の男達が私を舐めまわす男が響く。彼らを引き剥がしたかったが、両手は床に押し付けられたままだ。

「んんっ、そんな……気持ちよくなんか、っ、んんんっ! や……もう、舐めないで……やめて、やめてよお……!」

込み上げる恥ずかしさに私は思わず目を閉じ、顔を背ける。

そこへ――

「んんっ!? んむっ! んんんんんっ!!」

唇への弾力。4人目の男が、私の唇にしゃぶりついたのだ。

(なにこれ――まだ……!)

2度目のキスだった。1度目は口下部に、2度目は名も知らぬ男に。

「んぶっ、くむう……やめ――っぶう! んうっ! んぶじゅううっ!!」

首を振って逃れようとしたが、両手で顎を持たれて角度を固定されてしまう。私の唇が、一方的に舐めまわされていく。

「んくっ、んっ、ん……ちゅぶく、んむううう……!」

4枚の舌によって、私の身体が蹂躪されている。身動きを封じられた状態で一方的に責められる屈辱を味わう。

(あの時、助けたのに……必ず恩を返すとか言っていたのに……お金のため、欲望のために私を……うう……もういやああ……もう放してよお……)

「そろそろ、本番に行かないか。この娘のエロい声聞いていたら、俺もう、我慢できなくてや」

「いいですね。それじゃあ、少し広いところに移動しましょう」

男達は私から唇を離し、何やら相談すると、私をシャワールームの中央にある。比較的広い通路まで引きずっていく。

「いやああっ、何するの……やめてっ! 放してっ!」

私はタイルの上で、四つん這いの姿勢を取らされた。その両側に男がしゃがみ、手首を掴んで床に押し付け、私を立ち上げられないようにする。

そして私の背後から接近した男が、私の腰をがっしりと掴んだ。

「ひっ、まさか……それはダメっ！ ダメだってばあ!!」

既に男はズボンを下ろし、局部を露出させていた。勃起して地面と水平になったペニスが、私の大事な部分を狙う。

「それじゃあ、挿れるよ」

「いやっ、いやああああっ！ いやああああああああっ!!」

すぶり。ペニスの先端が膣内へと沈む。

2回目の性行為。愛液で濡れた私の秘所は、簡単にペニスを飲み込んでしまう。

「うう、あああ……入って、くりゅう……また、私の中に……」

すぶすぶとペニスが膣奥へと侵入し、男の腰が私のお尻に当たる。ペニスの先端がこつんと膣奥を叩くと、快感が脳天へと突き抜ける。

「ああううううっ、く、あああああ……!!」

「それじゃあ俺は、こつちを賣うか」

最後の男が私の前方に回り込み、

「な、それは——っく、むぐうううううっ!!」

股間のペニスを私の口の中に捻じ込んだ。

（嘘……私の口の中に、男の人の、おちんちんが……!!）

「っぶう!! んぐっ、ふむうううっ!! ん——っ! んぐううううっ!!」

ペニスが舌の上を滑り、口の奥まで挿入される。男は腰を振り始め、口の中をペニスが往復し始めた。

後ろの男も腰を振っている。腰と腰が打ち合う音とともに、振動が私の身体を駆け抜ける。

じゅちゅっ! じゅちゅっ! じゅちゅっ!

私は口と膣を同時に蹂躪されていた。ペニスに前後を挟まれた身体が軋み、悲鳴をあげている。

さらに両側の男達は、開いた方の手で私の胸を揉み始めた。垂れ下がった乳房を包み込むようにして、激しく指を動かしてくる。

「んぐ、ぶぐううう!! んんっ! んぐっ!! んっ、ちゅぐっ、むうううっ!!」

（ああ……私、4人に同時に犯されている……胸を揉まれて、口とあそこにおちんちんを突っ込まれて……逃げたいのに、手を押さえつけられて、動けないっ……!!）

前後の男は快感を貪ろうと、激しく腰を動かす。腰を打ちつけられるたびに衝撃が走り、お湯に濡れて肌に張り付いている巫女装束から水滴が飛び散る。

「ものすごい締め付けた。こんなに気持ちいいおまんこは初めてだよ」

「この娘、胸を触ると、身体がびくびく震えるんだよね」

「感じてるってことだな。まったく、巫女のくせに淫乱とか、駄目だろそれ」

（私は、淫乱じゃ、ないっ……!! これは、あいつに飲まされた媚薬のせいだからっ……!! 感じたくなんて、ないのに、身体が勝手に反応してしまう……!!）

「んぐうううっ!! んれうっ! んぶううううっ!!」

私の想いは、口に挿入されたペニスによって言葉にすることはできなかった。悔しさと、喉の奥に突き刺さるペニスの苦しさにより、私は涙を流した。

「気持ち良すぎて、もう出てしまいそうだ」

「俺もだ……舌が口の中で暴れてからみついて……もう我慢できない」

「……！ んっ！ んんん——っ!!」

（いやあっ！ 膣中に射精するのっ!? 膣中は、ダメえええええっ!! 出されたら、妊娠しちゃうううっ!!）

男達の腰の動きが早くなっていく。口の中と膣の中のペニスが小刻みに震え始めた。射精が近いのだ。

「出すぞっ！」

「でるううっ!!」

（ダメえええええええっ!! 出しちゃ、出しちゃダメえええええええっ!!）

ぶしゅうううっ!!

口内と膣内で、同時に精が弾けた。



「んみゅうううううううっ!!」

舌の上を熱いドロドロの液体が流れる。あまりの生臭さに、反射的に吐き出しなくなっ

だが、口をペニスで塞がれていてそれできない。
膣内にも精液が撒き散らされ、激しく暴れ回り、もたらされる快感により腰がびくびくと震えた。

（私、まだ精液出されてるんだ……熱い……口の中も、お腹の中も、熱いよ……）
やがて射精を終えた男達は、ペニスを引き抜く。

「ごほっ、がっ、がはっ……！　っ、あく、ぐ……ごほっ、ごほっ……！」

私は口の中に溜まっていた精液を吐き出した。

どさりと、私はタイルの上に倒れ込む。だが、これで終わりではなかった。私を四方から囲む男達は、その位置を90度ずつ回転させる。先ほどまで私の手を押さえ、胸を揉んでいた男が、私の正面と背後に移動した。

「ひっ……いやっ、もう犯さな——っぐううううっ!!」

男達は素早く私の膣と口にペニスを捻じ込む。

今後は先ほど射精を終えた2人の男が両側から私の手を押さえており、また身動きが取れない状況にさせられていた。

「うぶううっ！　んっ！　じゅれぐっ!!　んっ、んんんっ!!　んぐうううっ!!」

じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！

ぐっちゅぐっちゅぐっちゅ!!

2本のペニスにより、私の中がかき回されていく。

（もうやめてえ……！　そんなに激しく出し入れしないでよ……身体の中が熱いのが、また弾けちゃうっ……!）

「確かにこいつは、すごい名器だ」

「つてか、普通に犯しているけど、イカせることが目的だよな」

「そうだった。ちゃんと気持ちよくさせないと」

両側の男達が、思い出したように私の胸を触り始める。乳房全体を手で揉みしだきながら、指の間に乳首を挟んで、こりこりと弄んだ。

「んぎゅうううっ!!　んっ、んむうううっ、ちゅぐう、んんっ、みゅぐうう!!」

（ダメえ、それダメえ……乳首を弄られたら、身体が、ふわあってなっちゃう……!）

さらに後ろの男が激しく腰を振り、ペニスを膣の最奥まで突き入れた。ペニスの先端が膣奥を挟り、そのたびに強い快感が背筋を走り抜け、脳を溶かしていく。

「んんっ!!　んむぶくっ、んぐ、ちゅれう……んっ、んんっ、んんんんんっ!!」

（ダメえ……気持ちいいのが、強くなってる……こんなことで、いつちゃ……神気を失っちゃ、ダメなんだから……イカない……絶対に、いつてたまるかあ……!）

私は強い意志を持って、目の前の男を睨みつける。しかし、

「おお。その目つき、いいよ。ますます燃えてくるっ」

男の欲情に火をつけ、腰の動きを激しくさせる結果に終わった。口の中をかき回され、私から思考力が失われていく。そこを胸や膣からの快感に襲われ、私の身体はどんどん昂っていった。

「っぶぐうう！　んじゅっ！　じゅぶるぐっ!!　んんっ！　んっ、むぐみゅううっ!!」

「おや。この娘、イキそうですよ」

「俺達の責めがそんなに気持ちいいんだな」

「だったら思いっきりイかせましょう！」

男達の責めが苛烈さを増す。4人は一丸となって、私をイカせるために手や腰を動かしている。

（くっ、うろう……嫌、なのにい……こんなことでイきたくなんか、ないのに……ダメえ、我慢が、できないよお……あ、イク……ダメなのに、イっちゃうろ……!）

「んっ……んんっ、んんんんんっ!! んっみゅうろろろろろろろろろろ!!」

そして私は、絶頂に達した。

「おっ、イったぞ！」

「じゃあ、俺もっ！」

「私も出しますよおお！」

「ぶしゃあああああっ!!」

ペニスが口から引き抜かれた途端、その先端から白い液体が噴き出す。

「……! うっ、あああああああああっ!! いやあああああああああっ!!」

私は顔に精液を浴びた。熱い雫が眉間や頬にかかる。

続けて膈内のペニスが精液を撒き散らし、再び私の中を精液まみれにした。

「んひひひひひっ!! まだ、出てりゅうろろろ!! もう出さないでっ!! 抜いてっ、抜いてよおおおっ!!」

だが、男はペニスを抜こうとはしなかった。

どくどくどく……最後の一滴まで、私の膈に精液を放ってから、ゆっくりとペニスを引き抜く。

「んひひひひひっ……!」

ペニスを引き抜かれる刺激に身を震わせながら、私はタイルの上うつ伏せに倒れた。

（犯された……妖魔じゃない普通の人たちに、たくさん出されて……私、汚されちゃったんだ……）

「うろっ、はあ……はあ……っ、くろろ……うろ、うろ……私は、あなたたちを妖魔から守ったのに……こんなことって……うろ……」

また神気が失われていく。私は悲しみの涙を流した。

「ふっ。すっきりした」

「最高だったよ、君、ええと、名前なんだっけ？」

「名前なんてどうでもいいさ。それじゃあそろそろ、実験室に運ぼう」

「っと、そのまえに、まだ汚れちゃったから、洗わないとな」

男の一人が、私にシャワーノズルを向ける。

「んっ、くろろ……」

シャワーのお湯が、乱暴に私の涙を洗い流した。

私の身体を洗い終わると、男達は私を抱えてシャワー室を出た。打ちのめされ、放心状

態になっていた私は、抵抗することすら忘れ、男達に運ばれるままになっていた。

薄暗い通路をしばらく進み、やがて男達は、とある部屋に私を運び入れる。学校の教室くらいはありそうな大きな部屋には、眩しいくらいの照明が点いていた。部屋の中央に寝台が置かれ、その周囲をなやら機械のようなものが取り囲んでいる。

「なに、これ……」

その寝台は、普通の寝台とは異なる形状をしていた。脚を置くべき寝台の下半分が左右に分かれている。また、頭上には手枷が取り付けられている。さらに寝台の至る所から、身体を拘束するためのベルトが垂れ下がっていた。

私はその寝台の上に、無造作に寝かされた。

「っ……何を、するつもり……？」

「あれ？ 言わなかったっけ？ これから君をイカせるんだよ。何度も何度もね」

「そんな、いやよ……お願い、そんなこと、やめて……私、絶頂するたびに、神気を失っちゃうの、だから……」

「うーん。でも、社長からのオーダーが、君の神気を全部失わせることだからさ。残念だけど、諦めて」

「そんなっ……あつ……!!」

男達は抵抗しようとする私の身体を寝台に押し付けると、手首を枷に嵌め、身体中をベルトで巻いて拘束していく。

「ちよっと、これ……いやっ、外して……! 動けないっ……こんな、恥ずかしい恰好で……くう……」

両足を大きく開いた状態で、私は寝台の上に固定されてしまった。開いた股の間にあるショーツはすらされたままなので、剥き出しの淫唇が外気に触れ、ひんやりとした感触が伝わってくる。

「さて、実験開始ですよ」

白衣の男達が私の周囲に集まってきた。1人の男が、カートに乗ったテーブルを引きずってくる。そのテーブルの上には、小さな器具が複数置かれていて、

「ひっ……!!」

その器具が目に入った私は、思わず息を飲んだ。

円筒状の物体が、ずらりと並んでいる。その形状は、まるで男性のペニスのようだった。

いや、厳密にはペニスとは違う。なぜなら、それらの器具の表面には、無数の突起が付いていたのだ。その突起の数や形は、それぞれ異なっている。

(まさか、これを私に、挿れるの……?)

恐ろしい想像で、身が震える。あんなゴツゴツしたものを挿入されたら、私の大事なところが壊れてしまう。

「おっと。先に見せちゃいけないんだった。ほら、目隠しして」

「そうだったな」

男の1人が、黒い目隠しを私の顔にかける。

「いやっ……これ、っ……何も見えない……!!」

私は光1つない闇の世界に落とされた。周囲の状況を確認できないため、恐怖が何倍にも膨れ上がる。

（私、これからどうなっちゃうの……？）

私は寝台の上で身を震わせた。彼らの言うことが本当なら、私はこの寝台の上で、神気を全て失うまで何度もイカされることになる。

「ね、ねえ……もう、こんなこと止めよう……？ 私が力を失ったら、この街の人たちを助けられない……お願いだから、私を解放——っひゅん！」

初めに刺激が来たのは、胸だった。露出している乳首の真上に、振動する小さな器具が押し付けられた。

「うああああっ！ 何これっ……！ ぶるぶる震えて……んくううっ……！」

「ローターだね。左右の胸に1個ずつ。振動が弱いならもう少し強くするけど？」

「んぎっ、やああっ！ 止めてっ！ これいやああっ！！ 乳首がじんじんしてきて……うあ、うああああっ……！」

私は反射的にローターを引き剥がそうとしたが、両腕は頭上で枷にはめられており、まったく動かない。

機械による振動は、常に一定の速度で、私の胸を、乳首を刺激し続ける。

「それじゃあ、1本目、挿れるからね」

にちゃ。股間の淫唇に、何か硬い物が押し当てられる。

「ひっ……！」

「そんなに怖がらないでよ。これは“まだ”普通のパイプだから」

そう言いながら、男は私の膣内に棒状の物体を押し込んだ。

「っ、ああ……んあああああああっ！！」

すぶすぶ。ペニスを挿入されたような圧迫感が膣内に広がる。

（パイプって、おちんちんの形をしたもの……？ うう、固いのが、私の中に入ってくる……！）

パイプは奥まで挿入され、びっちりとした私の膣内を埋め尽くした。そこへ、

「スイッチオン」

カチッという小さな音。すると突然、膣内のパイプが振動し始めた。

「あっ、うあっ……これ、中で震えて、プルプルって、んいいいいいっ！！」

振動だけではなかった。押し込まれたパイプは、ぐるぐると回転している。回転と振動。2つの刺激により、私の膣内はぐちゃぐちゃにかき混ぜられる。

「何これえええっ！ 中で震えながら回ってるうう……！！ ダ、ダメえええっ……激しく刺激されて、また、変な気分になっちゃううう……！！」

私は必死に脚を閉じようとしたが、ベルトで固定された私の脚は微動だにせず、僅かに寝台を揺らしただけだった。

（振動が、ビリビリ伝わってくる……あそこも、胸も、震えっぱなしになって、頭がおかしくなりそう……！）

視力を奪われた状態だと、胸や膣にもたらされる刺激が、よりしっかりと感じ取れてしまい、その快感が増しているように思える。

「うっ、あああああああっ……！！ このままじゃ……また、私、イカされちゃう……！！ もうやめてえええっ……！！ これ以上イカされるのは嫌なの……！」

「いいんですよ、イっても。我慢しては実験になりませんから」

「くううっ……勝手な、ことを、っ……いきたくない……実験なんかで、機械なんか、イカされたくないっ……！」

「そうは言っても、呼吸が荒く、身体が震えていますよ。絶頂が近いはずですよ」

「そんな、こと……ないからっ……！ んあっ、くふううううんっ！」

強がってはみたものの、男の指摘のとおり、絶頂が近い。時間の経過とともに身体の奥の疼きが増しており、無意識に快感の頂、絶頂を求めてしまっている。

（私、機械にまで神気を奪われちゃうの……？ 我慢したいけど、快感が強すぎて、止められそうにない……私まだ、イっちゃうっ……！）

「んっ、んんんんっ！！ あ、んああああっ……もう、止めてえええっ……！ これ止めてよおおっ……！ んっ、あああつ！ ダメっ、くるっ、きちゃうううっ！！ イくっ……いやあああつ！！ 止めて！ 止めてええええええっ、く、あ……イくっ、イくうううううううっ！！」



快感が弾け、私は身を震わせた。

そして私の大切な、とても大切な神気が、失われていく。

「うっ、あう……はあ……はあ……まだ神気が、なくなっちゃう……うう……もういやあ……」

私の絶頂後、股間のパイプと胸のローターの振動が止まった。その後すぐに膣からパイプが引き抜かれる。

「んっ、あっ……あ……ん、くう……これで、終わり……？」

徹底的にイかせると言っていたのに、パイプを抜いてくれたということは、もう止めてくれるのだろうか。

「いや、これから始まるのさ」

「絶頂まで45秒。この娘はかなり淫乱だね」

「調教し甲斐がないなあ」

「まあデータだけはきっちり取ろうよ」

今のはまだ、準備運動に過ぎないらしい。

「い、いや……もう、いや——んひいっ！ なにこれ……冷たいっ！」

冷たい液体が胸にかけられ、私はびくりと背中を震わせる。

「ローションだよ。これを胸に付ける前に、塗らなきゃならないんだ」

「胸に、何を……？」

「最新式のマッサージ器さ。もちろん、性感マッサージだけど」

男はそう言いながら、カップ状のものを2つ、私の両胸に取り付けた。ゴムのような感触のそれは、取り付けられているローターごと、胸全体を吸い上げるように包み込む。

「なに、これ……胸に、びっちり吸いついて……！」

「君の胸に丁度フィットするサイズがあつてよかった。そして乳首のローターを振動させるぞ？」

ウィィィン！ ローターが再び震えだす。すると、胸を包んでいたカップが、脈打つように動き始めた。

「んっ、あっ、あ、ああっ……胸全体が動いて……んっ、っ、んんっ……」

（何十本もの指で、胸を揉まれているみたい……乳首も振動して、気持ち、いい……）

乳首を刺激されながら胸全体を揉まれるというのは、未知の感触だった。甘い快感が胸から溢れる。その快感につられて、下腹部がきゅうんと疼いた。

「どうだい？ 気持ちいいかい？」

「んんっ、うあっ……気持ち……っうう、よくなんて……」

「そうかい？ それはマズいな。ちょっと強くしてみようか」

「……！ やめっ、っ——んんんっ、くうう、あああああっ……！」

乳首のローターの振動が増し、併せて胸を揉むカップの動きも激しくなる。必然的に、もたらされる快感の量が増えた。

「これでどうかな？ 気持ちいいかい？」

「っ、く、ううう……」

認めたくなかった。なので私が答えずにいると、

「ちなみに、ローターの振動は10段階あって、今は下から2番目の強さだから」

「……！」

（これで、2番目に弱い……？ あと8段階も強くできるの……？）

「改めて聞くよ？ 気持ちいいかい？」

「……気持ち、いいです、っ……ううっ……」

私は絞り出すような声で答えた。正直に快感を認めるのは屈辱だったが、これ以上振動や揉む強さを増やされたら、胸への快感だけで絶頂してしまいかねない。

「そうかそうか。それはよかった。それじゃあ、5段階くらいにしておこう」

「いっ、そんな……っあああああっ！」

胸への責めの激しさが跳ね上がった。胸全体を絞るような摩擦により、巨大な口を持つ

生物に胸を吸われているような感覚に襲われる。ローションで胸が濡れているため、ぬめぬめとした感触がその想像に拍車をかけていた。

「んっ、あああああっ……!! 気持ちいいって、認めたのに、とうとう……んっ、んあああっ……ひどい、っあ、んっ!! とううあああっ……!!」

「認めたら強くないなんて言っただけさ。胸を一気に開発するには、これくらいの強さから始めないと、時間がかかりすぎる」

「開発……?」

「そうさ。こいつの性感マッサージなら、胸の感度を一気に引き上げることができる。しばらく続けていけば、普通に胸を揉まれただけで絶頂できるくらい、敏感になるはずさ」
「なっ……そんなの嫌っ、今すぐ止め——っ、あああっ!! これ激し、っ、とうとうううっ……!! もうやめてっ、胸が敏感になるなんて、いやああああっ!!」

私は叫んだが、男は振動を止めようとはしなかった。刺激に震える私を眺めているのか、満足そうな笑い声が聞こえる。

「元々敏感な君なら、そろそろ胸だけでイクんじゃないか?」

「私は、敏感なんかじゃ……!! これは、あいつに飲まれた薬のせい、っ、くううううっ……!! 気持ちよくなってる、なりたくないのに、身体が勝手に、っああああああっ!!」

男の言うように、胸の感度が上がっているのか、ますます快感が増えていく。膣を責められているのとは違った感覚だが、私は絶頂が近づいていることを感じた。

（ダメっ、これ以上イったらダメなのに……それに胸だけでイクなんて、嫌なのに……快感が溢れて、止まらないっ……!!）

そして私は、胸の器具に吸い上げられるようにして、体内から快感の波を溢れさせた。
「あっ、あああっ、ああああああっ!! イくっ!! 胸だけなのに、私、イっちゃううううううっ!! くうううううああああああああっ!!」

私は寝台の上で、大きく身体をのけ反らせながら絶頂した。

絶頂状態が終わると、どさりと背中が寝台に落下する。

「はあ、はあ……っく、あああ……まだ震えてる……止めて……もう止めて……」

「止めないよ。開発が終わるまではね。ほら、6段階目だ」

胸の振動がさらに強くなる。

「んひひひひひひっ!! ダメええええええっ!! 気持ちいのまたきちゃう……またイっちゃうからああああっ!!」

私はもがいたが、胸の器具はびったり乳房に張り付いていて、はがれそうになかった。私はどうすることもできずに、その器具がもたらす快感を身体に蓄積させていく。

「ダメえええっ! まだイクっ!! イく! イくううっ!! イくからあああああっ!!
ううう、くぐううううああああああっ!! ダメっ! イ、きゅっ…… ———んんんんああああああっ!!」

胸への刺激だけで2度目の絶頂を迎えた。容赦なく、私から神気が失われていく。

「あ、あああああっ……もういやあ……止めてえ……んあっ、これ、止めてえ……」

「それはできない。あと2時間はこのまま続けるよ。そういうプログラムだからね」

「え……?」

（今、この人は何って言ったの? 2時間? 2時間これ続ける気?）

「まったく。今夜も徹夜だよ」

「その分稼げるんだからいいじゃないか」

「そういうわけで、もっともっと気持ちよくなっていからね」

「2時間で何回イくかなあ。楽しみだよ」

軽い調子で交わされる会話に、私は愕然とした。

この人達は人間じゃない。妖魔よりもタチの悪い、悪魔だ。

「いや、いや……いやああ……お願い、もう止めて……これ以上されたら、私、エッチな身体になっちゃうからあ……」

「何を今さら。これは君をエッチな身体にするためにやっているんだよ。いい加減、諦めてほしいな」

「い、いや……いや、いやああ……」

「よし、それじゃあ2時間別室で観察だ。交代で休憩をとるぞ」

「……いや、っ……」

「じゃあね、巫女さん。まだ2時間後に」

「いやああああああああっ!!」

私の叫びは無視された。男達の気配が遠ざかっていく。ボタン、と扉が閉まり、私は室内に取り残された。

ヴィイイイイーン!!

ローターの振動音だけが、私の耳を打つ。

「そん、な……んんっ、く、ああああっ……! 誰か、誰かこれ、止めてえ……んあっ、あ、あううんっ……まだ気持ちいの、きちゃうう……あっ、ああああっ……! あううううっ……んっ、あっ、ああああっ……ダメっ、まだくりゅっ……んひいっ! あっ、あ……ああ————っあああああああああ!! イぐうううううううっ!!」

振動が、止まらない。

快感が、止まらない。

絶頂が、止まらない。

……男達が帰ってくるまで——2時間。開発は、まだ始まったばかりだった。

9

「うあっ、ぐ、んいっ……! あぐ、んあああああっ……イぐっ、いつ、きゅううう……!」

びくん、びくん。絶頂に伴い、私の身体が寝台の上で大きく跳ねた。

気の遠くなるような時間が流れた。その間、胸だけに刺激を送り込まれ、私は数え切れないほどの絶頂を繰り返した。

絶頂のたびに、私の神気は失われている。既に私の神気は、半分近くまで失われていた。

「んあっ、あっ、あ……ん、んあっ?」

(振動が、止まった……)

近くで男の音がする。いつ男が戻ってきたのか、気が付かなかった。それほどまでに私

「だいぶ開発されたかな？」

(胸がじんじんする……胸が熱くて、自分の胸じゃないみたい……)

「もう、これ、外してよ……」

「駄目駄目。これから本番だっていうのに」

男の手が私の秘所を撫でる。

突然もたらされた下腹部への刺激に、私の腰がびくと跳ねた。

男の言うとおり、2時

「これだけ濡れてりゃ、ローションはいらないな。さっそく挿れよう」

（また、あそこにはパイプを入れるの……？ 入れられたら、とっても気持ちいの……？）

身体の疼きが膣内への刺激を欲してしまっている。

「まずはこれからでしょう」

私の膣壁をかき分けて、ペニス状の物体が押し入ってくる。しかもこの物体には、所々

あまりの刺激とそれに伴う快感に、私は寝台の上で痙攣する。

「ひぎっ……!!
んああああつ!!
それっ、ダメええええええええつ!!」

「あぐっ、あっ、あああああっ!!」じりじりって、中で、っひひひひひんっ!! あっ!

ヴィンヴィンヴィン！

「うあああああああああつ!! ああつ!! じゅぼじゅぼって、動かしちゃダメええええ

ええええっ!!」

パイプがストロークを始めた。男が手を前後に動かし始めたのだ。

「振動と回転とピストン、同時に味わうと気持ちいいだろ？」

「いやああああああっ!! 私の中、ぐちゃぐちゃになるうううっ!! あっ!! あああああああっ!! もうダメっ!! ダメ、ダメええええええええええ!! イぐうううううううううううっ!!」

そしてあっけなく、私は達した。これまでで最大の快感に襲われた私は、思考が真っ白に停止し、ただ口をばくばくと痙攣したように開け閉めを繰り返した。

「あっ、ああっ……んあっ、あ、あうっ……んっ、あ……」

そんな私に対して、男は追い打ちをかけるように、パイプを出し入れする速度を速める。

「うっ、あああああうううっ!! ダメええ……いつてるかりや、わたひっ、いつてるかりやああ……」

「何度でもイけ」

「んああああああっ!! 激、しひいいいいっ!! ああああ……! イったばかりなのに、まだすぐ気持ちよく……んあ、あ、あああ……! まだイくう! んんっ! イくっ、イくうううっ!! イくからああああああああっ!! んあああああああああああっ!!!」

私は連続で絶頂した。神気がどんどん失われていく。

それでも男は、パイプを動かすのをやめない。

「あっ、ああああああっ!! まだ、動いてりゅううう……もう止めて、止めてえ……! んああああああっ……! 何回も、いつじやうのおお……! あ、つぐうううう……! んっ、んんんっ、んあ、あああああ——また来てりゅっ……いつ、ぐううううううっ!!」

私は寝台の上でのたうち回った。際限なく溢れ出る快感の暴風に、身が切り裂かれていく。絶え間なく脳に快感の波が押し寄せ、抵抗力が根こそぎ奪い去られていった。

「あああ……もう、ダメえええ……わらひっ、こわれりゅうう……気持ちよすぎて、壊されるうう……!」

目隠しにより真っ暗であるはずの視界が、チカチカと白く点滅する。眉間やこめかみなどがズキズキと痛い。あまりに大きな快感に、身体が拒否反応を起こしているようだった。

「そろそろ次に移ろうか」

「じゃあ交代だね」

突然私に突き刺さっていたパイプが無造作に抜き去られた。不意に訪れた平穏。だがそれは、数秒もしないうちに破られる。

「んっ、きゅうううううっ……! また、入って、くるっ……!」

すでに振動と回転を行っているパイプが、腔内にねじ込まれた。このパイプにも突起があって、私の腔壁をぐりぐりと刺激する。

(これ、さっきのと違うところでは？)……ダメっ、さっきより、敏感なところにあたる……!)

男はパイプを前後に動かす。じゅぶじゅぶと水をかき混ぜる音が響いた。

「んあっ! ダメそれ、気持ち……んいいいいっ!! あっ、んあああ……!」

「どうしたの? さっきのより、こっちの方が気持ちいいの?」

「うあっ、くひゅううっ……気持ち、いいです……こっちの方が、っ、あ、くあああああ

っ……!!」

あまりの気持ちよさに、男の質問に素直に答えてしまう。悔しいとか、屈辱だとか、そういう反抗心は既に消えうせている。ただ身体に叩きつけられる快感を処理するだけで精一杯だった。

いや、快感の処理など、まったくできていない。身体中で暴れ回る快感に、ただ一方的に蹂躪されている。

(敏感なところを責められて、パイプの振動が激しくて……気持ち、よすぎるうううっ……)

「あっ、あ、ああっ……! ダメ……! イっちゃう、っ……! イくっ、イっ、くうううあああああっ!!」

絶頂。

何も見えない分、いぼいぼの突起が膣壁を擦る感触がよりリアルに感じられる。

私が絶頂しても、回転も振動も出し入れも止まらない。いつまでも快感が溢れ続ける。

「あああっ、んあああああっ! んいっ!! これ、気持ちいいっ……んあああああっ!! わらし、おかしくなっじゃう……んんん!! あっ! なううううっ!! ダメ、またダメ、んぐあうっ……! イくよお、イくっ……! イくううううううっ!!」

がくがく。連続での絶頂で痙攣が続き、手足の関節が痛い。同じ姿勢で責められ続けると、迫る快感を少しも受け流すことができない。

「絶頂までの間隔が短くなっていくね」

「まだまだ。もっと開発すれば数秒でいくよつになる」

男達の会話に、私は恐怖した。このまま責めを続けられたら、男の言うとおりになってしまふという予感がある。

「ぎっ、あ、いやああああ……もうイくのやだあ……! わたしっ、そんなエッチな身体になんたくなひいっ!!」

「もう十分エロいって。パイプで簡単にいくんだから。ほら、まだいきそうになってる」

「んあああああっ!! もうじゅぶじゅぶしないでえええええっ!! んあっ、が、あああああっ!! またイくかりやっ……! イっじゃ、うううううううっ!! イくっ、イっでりゅうううううっ!!」

快感が弾け、頭の中を幸せで一杯にする。私の身体が私の意識に反して大きく跳ね、寝台をギシギシと揺らした。

「うっ、ふううううっ……んっ、あ……くうううううっ! はあ、はあ……」

私の膣からパイプが引き抜かれる。そして当然のように、また別のパイプが挿入された。「くひいひいひいんっ!!」

挿入されただけで、私は身体を大きくのけ反らせた。

前回のパイプとは違う突起の配置。いや、配置だけではない。突起の角度が斜めになっていて、より鋭利に膣壁を抉るような形状をしている。

「あ、これダメえ……! 深いとこ、当たってりゅう……!」

そして男がパイプのスイッチを入れると、予期せぬ刺激が私を襲った。

「あ、あああああああっ!! 震えて、んあっ! くううあああああっ!!」

膣内だけでなく、クリトリスにも振動が伝わる。

「ここからは、クリトリスも同時に責めることができるパイプを使っていくからね」
「いやあああああつ!! 中と同時になんて、刺激つ、強すぎて、んぎあああああつ!! 壊れるうううつ!! 私、こわれちゃうよおおおつ!!」

男はパイプの抽送を開始した。パイプの表面についている小さな筒が振動しており、それがクリトリスに当たる仕組みのようだった。その筒がパイプの抽送に合わせてクリトリスの上を滑ることで、擦りながら振動を与えてくる。

ジャウッ! ジャウッ! ジャウッ!

振動により愛液がまき散らされ、私の心ともがびしょ濡れになっていく。

「んいいいあああああつ!! ダメえええええつ!! つ、ああ、ああああああああつ!! んいっ!? うあああああああああつ!! イってるうう、イってるのおおおおつ!!」

気付けば私の身体は絶頂していた。肉を抉られる感触が気持ち良すぎて、簡単に達してしまふ。

「いい感じだね。それじゃあ、胸の振動も再開しようか」

「——! つあ、ダメつ、それダメ……んぎゅうううううううつ!!」

突然胸の器具が動き始めた。乳房を絞るような動きと、乳首への振動が再開される。

「もう面倒だから強さ最大にしておくね」

「うっ、ぎつ、あ……ああああ……胸、強い……あ! んあああああつ!! うあああああああつ!!」

私は大きく口を開いて喘いだ。

膣への刺激と、胸への刺激、それぞれが相乗効果となり、私の快感を爆発的に高めていく。

「うっ、あああああつ!! 同時なんてムリいいいいっ!! ああああああつ、もう許してええええつ!! もうやめてよおおおとおおおつ!! 気持ちいのっ! 気持ち良すぎるのおおおつ!! んっ! あああつ!! ダメ、イクっ……イクイクイクううううううううつ!!!」

絶頂。だが、胸の振動も、胸を揉む動きも、クリトリスへの振動も、クリトリスを擦る動きも、パイプの振動も、パイプの回転も、パイプの抽送も止まらない。

私に快感を与え続ける。

「うあああああつ!! あ——っ!! ああ——っ!! んぎつ、がっ!! がああああああつ!! んっ、ん、んんっ、つあ、あ、ああ、あああああつ!! まだイクっ!! イくっ!! イくかりゃあああああああつ!!!」

全身が、痙攣し続けていた。だらしく垂れさがった舌先までもが、小刻みに震えている。

目隠しの裏から垂れ落ちる涙と、私の叫びによって撒き散らされる唾液が混ざり、顔をドロドロに濡らしていた。全身は汗でびしょりと濡れ、白衣や袴に染み込んで私の身体にびっちり張り付いている。

だがそれらの感触を不快に思う余裕は、今の私にはない。

「ちなみに、パイプはまだ30本以上あるから。なるべく全部試したいね」

「うあああああああつ!! いやあああああああつ!! もうイかせないで

えええええええつ!! わらひおかしくなるっ!! こわれりゅっ!! んぎいいいいいい!! もうやめれえええええええつ!! イくかりゃ……またっ、イクっ、か——んなうううあああああああああつ!!!」

私は喉を枯らしながら絶叫した。

しかし、それで男達の責めが弱まったりはしない。彼らは時折パイプを入れ替えながら、淡々と私を責め、絶頂させ続けた。

ウィンウィンウィンウィン!!

「あああああああああつ!! 奥までぐりゅうううううっ! んぎっ、がつ、あああああつ!! イっじゅうううううう……もうやめ、っ、あ、ああああ……あつ!! ああああつ!! イ——く——ううううあああああああつ!!」

じゅぶじゅぶじゅぶ、じゅっぶ!!

「んっ、がうう……うう、もう、許してえ……あああつ、イきすぎて、もう、頭おかしくな……んぎっ……! すっといってるのお……神気、なくなっちゃうのお……! んあああ! もう止めてよ、ゆるひて……いやあああああ……あ、まだイクっ、んっ、んんっ、ん——イ、くうう……! っ、がああああああああつ!!」

ジュイン! ジュイン! ジュイン! ジュイン!

「おおおおおっ、こっ、ぐうううあああう……もうムリい……あ、ああああ……死ぬ、じんじゅうっ……んんっ……イきすぎて、私、わらしっ……っ、きゅううううう……! ダメ、ダメ、ダメえ……まだきちゃうっ……あ……あ……! うっ、あ————っく!! んはああああああつ!!」

ぞぶっ、ぞぶっ、ぞぶっ、ぞぶっく!!

「ううっ、うっ……っ、くうう……ごめんなさい……ごめんなさい……! もう許してください……んあっ、お願いします、もうイカせるの、やめで——っあつ!! また、イッてりゅう……あ、あ……私が私でなくなっちゃう……んっ、んぐううううっ!! イくっ、イクうう、イクうううううううう……!!!」

ちゅくちゅくちゅくちゅく……

「うあ……あぐっ、んっ……あ、ああ……んぐっ、うああ……気持ち、いいよお……んあうっ……ぎっ、あ……ああ、んっ……あ、う、くう……イ、くう……! んんっ……!!!」

じゅっほ! じゅっほ! じゅっほ!

「……うあ……あ……あ、んぐっ……あ————っあ………イ、く……んっ……ああ………うう……」

何度絶頂を重ねても、男達の責めは終わらない。
私の心が、絶望に染まっていく。

10

どれくらいの時間が経過しただろうか。

30分？

1時間？

それとも10時間？

私にとっては永遠に近い責め苦だった。

そしてついに、その時が訪れる。

「イ、きゅ……イくうううう……！」

何十本目か分からないパイプが一際強く捻じ込まれ、私は絶頂に達した。

同時に、私は感じる。

（あ、あ、ああ……神気が、なくなる……私の神気が、全部、なくなっちゃった……）

神気の最後の一滴が、今、私の中からこぼれ落ちた。

それは即ち、退魔巫女としての力を完全に失ったことを意味する。

（こんな、こんなことって……お姉ちゃん、みんな、ごめんなさい……私もう、退魔巫女じゃなくなっちゃった……）

神気によって形作っていた退魔巫女の装束が、音もなく崩れ去っていくのを感じる。視界を塞がれていて分からないが、元の制服姿に戻っているはずだった。

「うう……ひどい……こんなの、あんまりだよ……」

大量の涙が瞳から溢れ、声に嗚咽が混じる。

「あっ、巫女じゃなくなったね。神気ってやつが、全部なくなったのかな」

「社長のオーダーは、これで完了かな」

「これでポーンスゲットですね」

「じゃあ俺、社長に報告してくる」

パイプが引き抜かれ、胸の振動が止まる。私への責めは終わりを迎えた。

「ううう……ひぐっ……うううう……」

（胸とあそこ、じんじんするよお……私の大事なところ、壊れちゃったの……？）

長い責めからの解放に、私は寝台の上でぐったりとしながら、浅い呼吸を繰り返した。そしていつしか、眠りについていた。

11

「そろそろ目を覚ましてください」

私の目隠しが乱暴に外される。

「んっ……うああ……？」

私は意識を朦朧とさせたまま、なんとか目を開けた。
見覚えのない場所だった。わずかな白色電球が、うっすらと室内を照らしている。冷たいコンクリートの床に、私は仰向けで寝かされていた。

「……っ、ぐ……そうだ、私……」

そして思い出す。身体に刻まれた地獄のような責めの記憶。そして、神気をすべて奪われ、退魔巫女としての資格を失ってしまったことを。

神気で作られた巫女装束は消滅しており、制服姿に戻っている。

「神気……現装……！」

絞り出すように声を出す、私の体内に神気が感じられない以上、再び巫女装束を身に纏うことは不可能だった。

「どうやら、完全に神気を失っているようですね」

「っ……！」

私の目の前に立っているのは、日下部だった。私の処女を奪い、部下達に私の神気を全て奪わせた張本人が、目の前にいる。

私は憎しみを込めた視線で日下部を睨みつけた。それが私にできる唯一の抵抗だった。度重なる凌辱で疲弊しきっている今の私には、肘を付いて半身を起こす力すら残っていない。

「ここは、どこなの……？」

「私のビルの地下室です。あまり人目につきたくないことをする際に用いる場所ですね」
コンクリートで四方を固められた、殺風景な部屋。確かにこの部屋で大声を出しても、外は漏れないだろう。

「私に、ここで、まだ何かするつもりなの……？」

「ふむ。その怯えた表情、すこしいですね。また私が犯してやりたいところですが、今回の相手はこの者達です」

日下部はパチン、と指を鳴らした。

すると、部屋の四隅の暗闇で、黒い影が怪しく蠢いた。

「ひっ……！」

暗闇から姿を現したのは、餓鬼だった。その小柄な妖魔がわらわらと、数にして二十匹以上は出現し、私を取り囲む。

「な、なに……こいつら……」

「あなたの身体はとても健康です。そして、部下たちによって開発が終わっている。となれば、ここにいる餓鬼達の性欲処理係、さらには苗床になってもらおうと思ひまして」

日下部はニタニタと笑っている。対する私は、驚愕に顔を歪めた。

「せいよく、しより……？ なえどこ……？ 私が、餓鬼に、犯されるっていうの……？」

餓鬼は、私達退魔巫女にとって、触れるだけで消し飛ばせるような、雑魚中の雑魚だ。そんな相手に、身体を自由にされるなんて、あってはならない。

いや、違う。神気を失った私はもう、退魔巫女ではない。神気がなければ、餓鬼に對抗することはできない。

「それでは、彼らの相手をお願いしますね。餓鬼の精液があれば、食事水分補給も不要でしょう。一週間ほど経ったらまた様子を見に来ますので」

「い……や……お願い……やめて……助けて……お願いっ……」

部屋を出ていこうとする日下部に、私は涙ながらに訴えた。一週間も餓鬼たちに犯され続けたら、私は本当に壊れてしまう。

「いい声ですなあ。一週間後が楽しみです……」

笑顔で振り返った日下部は、言葉の最後に短くこう付け加えた。

「……やれ」

それを合図に、周囲の餓鬼達が、仰向けに転がる私めがけて、一斉に飛びかかってきた。

「きゃっ、あ、いやああああああっ!! やめっ……やめてえええええええっ!!」

餓鬼の手が、私に触れる。神気があれば簡単に防げるはずのその手を、今は遮るものがない。

ビリビリ、と、掴まれた制服が破れ、細切れの布にされていく。ブラジャーやショーツも引きちぎられ、胸や股間が剥き出しになった。

「くっ、このおおお……餓鬼の、くせにい……んひっ、や、私の身体、触らないでっ……!」

餓鬼の手が私の肌を、胸を、股間を撫でる。化物の手で触られているというのに、日下部に薬を飲まされ、男達に刺激を与え続けられた私の性感帯は、悲しいほどに快感を生み出している。

特に胸は乳首が鋭く立っており、少しの刺激でも身が震えるほどの快感となっていた。

「胸、激しく揉まないでっ……くうう、やだあ、こんなで感じるの、やだあああ……」

……! ああっ!? なにそれ……餓鬼のおちんちん、私に入れ——っ、くううううんんっ!!」

餓鬼の股間に出現したペニス。その小さな体には似つかわしくないほどの巨根が、私を貫いた。

(色欲型の餓鬼は、相手を犯す時にだけ、ペニスを出現させる……でも、こんなに大きいは……) なんて……どれだけ欲望を溜めこんでいるのっ……!」

「うあああ……やめ、てっ……太い……っ、あああ……! 激しく腰を振っちゃ、ダメえええ……! んああっ、激しくされると、気持ちよくなっちゃう……あああ、胸も感じる……いやああ……!」

周囲の餓鬼達、すべての股間に、ペニスがあった。

餓鬼に身体を貪られる屈辱。だがそれ以上に、私は快感を覚えている。餓鬼の責めに、身体は悦んでしまっていた。

「あうっ、んんっ!! 奥まで突かれて、んあああああ……! こりこりって、当たって……くひい……あっ、あっ、ん——っぶおとおおっ!! んぐ、んむううううっ!!」

突然、1体の餓鬼が私に跨ると、股間のペニスを私の口に捻じ込んだ。

(いやあああ……! 餓鬼のおちんちん、啞えさせられてっ……! 太いのが、口の中一杯に入ってる……!)

「んぐ、っぶくっ!! んみゅうううううっ!! ん——っ!! んぐぶううううっ!!」

じゅぽ! じゅぽ! じゅぽ!

じゅっく! じゅっく! じゅっく!

2本のペニスが激しく私の体内を穿つ。その間も、周囲の餓鬼達は私を抑えつけながら、

胸を刺激したり、肌にペニスを擦りつけたり、身体を弄んでいた。

「んっちゅ、ぐ、むぐぐ……んっ、んんんっ!! んむっ、ちゅれうっ、ぐ、おっ、ぐむぐうううっ!!」

餓鬼は狂ったように腰を振る。長い間抑圧されていた性欲を発散できるこの状況に、こそとばかりに欲望を私にぶつけている。

そして開発された私の身体は、その欲望を受け入れてしまっていた。身体中に、快感が溢れていく。

(ダメっ……私、餓鬼に犯されて、気持ちよくなって……イっちゃう……! 嫌なのに、餓鬼相手にイきたくなんてないのに……感じすぎて、我慢できないっ……!)

「んむうううううっ!! んんっ!! んぐうううううっ!! ひむっ!! ぶらひっ、ひぐううううううっ!!」

快感が弾け、私は達した。と同時に、餓鬼のペニスが震える。

「っぶ、ぶぐうううううううっ!!」

ぶしゃああ、と、口の中と膣の中で精液が放たれ、頭の中が真っ白になった。どくどくと、2か所から注ぎ込まれる白濁液の感触を、虚ろな意識で感じ取る。

(ああ、出されてる……餓鬼の精液で私の身体、汚されちゃってる……)

日下部は、私を餓鬼の苗床にと言っていた。餓鬼の精液で妊娠する。考えただけで気が狂いそうになる。だが餓鬼の行為を止める力は、もうない。

「っ、ぐはあっ……こほっ、こほっ……はあ、はあ……ひっく、くは、っ……はあ……んぐううううっ!! むぐおおおおおっ!! んんんんんんっ!!」

精を放った餓鬼が私から離れた途端に、別の餓鬼が私の口と膣にペニスを挿入する。

(そんな、連続で、なんて……ああ、また突かれてる……私の身体、何をされても感じちゃうっ……!)

「ちゅぐ、れじゅうう……むぐう、ぶ、ぐううううんっ……! じゅぐっ! んみゅうううっ!! っぎゅううううううっ!!」

じゅぶっ! じゅぶっ! じゅぶっ!

ぐっちゅ! ぐっちゅ! ぐっちゅ!

妖魔に身体中を襲われ、私はもう、何も考えられなくなっていた。ただ化物に犯されるだけの肉の塊。それが私だった。

「んんんんんっ!! んっ! みぎゅうっ!! んっ!! ん——んむうううううううううっ!!」

私は絶頂する。すると、タイミングを図っているかのように、口と膣に精液が撒き散らされる。体内に叩き込まれる灼熱の欲望に、私はさらに身を振るわせた。

さらに同時に、周囲にいる二十四匹の餓鬼達が、一斉にペニスから射精した。

「うあ……あ……! ああああああああああ……! 熱いっ……あつひいいいいいいいっ!!」

私の身体に、大量の精液が降り注ぐ。熱して溶けた蠟燭を身体中に垂らされたような熱と衝撃に、私は身悶える。

「あああああ……くうううううっ!! あがあああああ……ダメっ、わたし、餓鬼にせーえきかけられてっ、イぐっ!! イっちゃううううううううっ!!」



びくん、びくん。

精液に打たれながら、私は身を震わせる。

「はうううううう……んくっ、はあ、はあ……これで、終わり……？」

ここにいる全ての餓鬼が射精したようだった。男は一度射精すると、しばらくは性欲がなくなると聞いたことがある。日下部も、配下の男達もそうだった。

しかし……餓鬼のペニスはどれもまだ、勃起したままだ。そう、こいつらは男というカテゴリーで判断してはいけない。性欲の権化である妖魔なのだ。一度射精したくらいでは、その欲望が尽きることはない。

「あ……ああ……いや……ああ……はは、っ、あはははっ……」

そして私は壊れた。

餓鬼達の性欲を死ぬまでこの身で受け続ける。その運命を理解した私は、考えること、抵抗するということを放棄した。

一方的な凌辱が続く。

(気持ちいい……！ 気持ちいい……！ 気持ち、いいよ……！)
 「んぐむうっ！！ んんっ！！ んみゅぐうううっ！！ っぐううううううううっ！！
 れむっ、ふむううううっ……っば、ぐ、はあ、はあ……みゅぐっ、んんんっ！！ んじゅぐ
 ぶううううううっ！！」

(気持ちいい……ああ、気持ち良すぎる、っ……！)
 「んがっ、あ、んあああああ……激し、壊れ……ひぎいいいいいっ！！ はあんっ、
 あ、くあああああああっ！！ イってりゅ、すっといって……んああああああっ！！ んっ、
 んあっ、ううっ、くああああああっ！！」

(気持ち……いい……すく、気持ちいい……)
 「んぐっ、ふむぐぐぐ……んっ、ん、っ……うえりゅろっ……むぐうううっ……んっ……
 んんっ……っご、おおっ……おっ、ぐ、うぐううううう……！！」

(きもち、いい、です……いいのお……)
 「あぐうう……うっ、ぐうああ……う、ぎ……あ……うあ……ん——くああ……ひぐっ、
 うっ、あああああ……」

(……ああ、きもち、いい……)
 「んぐ、んっ、ん……んっ、んぐ、ぐ、んっ……ん……れう……っ、ぐ……んっ……」
 (……いい……いいよお……)
 「あ……ああ……んっ……あ——ああ……ん——ああ……」

(……きもち、い、い……)
 「……っ……う、あ…………あ————」

(……)
 「……」

そして私の身体は動かなくなった。

12

どれくらい時間が経っただろうか。
 餓鬼達はまだ私の身体を賣っている。
 私はまだ、生きているのだろうか、それとももう、死んでしまったのだろうか。
 身体には何の感覚もない。ただの人形になってしまった。

『咲良……』

(……?)

不意に、私の名前が呼ばれたような気がした。

(この声は、お姉ちゃん……?)

姉と思しき声を聞き、私の意識が僅かに戻る。そして気付く。私の指が、右手の小指が光っていることに。

(これは、お姉ちゃんがくれた指輪……指輪が、光ってる……?)

白く眩い光。温かく、優しく、懐かしみを感じる。

その輝きが頂点に達した時、バキンと、指輪が弾けた。

「……!」

すると砕けた指輪の中から、懐かしい感覚が巻き起こる。

(これは、神気……? どうして指輪の中から……?)

指輪から生じた神気は、私の体に吸い込まれていく。私に、私の中に、戦うための力が戻ってきた。

「……っ! 神気、現装!」

私は叫んだ。すると、神気が形を変え、巫女装束となる。

「グギャアアア!」

私に触れていた餓鬼が身を焦がして悲鳴を上げた。私に挿入されていたペニスが塵となって消える。さらに、私の体内に溜まっていた邪悪な餓鬼の精液もまた、浄化されるように消えていくのが分かった。

「これは……お姉ちゃんの神気……?」

姉が、あの優しい姉が私のために、指輪に自らの神気を入れ、持たせてくれていたのだ。

今私の体にある神気は、元々保持していた量の約半分くらいだった。一定の年齢を超えると神気を身に宿せないため、姉が保持している神気も私と同じくらいのはずだ。つまり姉は、自らの神気の半分以上を私に持たせていたということになる。

(ありがとう、お姉ちゃん……)

姉への感謝が胸中に溢れた。と同時に、姉の想定する最悪の事態を引き起こしてしまっただことがひどく悔やまれた。

「でも、これで……戦える!」

私はポロポロの体に鞭を打って立ち上がった。私を取り囲む餓鬼は、神気の出現にうろたえている。猶予を与えれば、ここから逃げ出してしまうだろう。

神符はすでに目下部との戦いで失っている。ならば……

「はあああああああっ!!」

私は神気を半球状に展開させた。神気の結界。低級な妖魔は、この中では存在することができない。

「グッキイイイ!? ギャアアア!!」

放出した神気が室内を埋め尽くした。神気にあてられた餓鬼達が、次々と消滅していく。やがて全ての餓鬼は塵となって消えた。

「やった……」

私は周囲に展開させた神気を体内に戻した。薄暗い室内に、今は私1人だ。

「ぐっ……あ、はあ……はあ……くう……」

体の疲労は限界に達している。長時間受けた凌辱に、疲弊しきっていた。だが、ここで倒れるわけにはいかない。

（日下部が戻ってくる前に、脱出しないと……）

今の私では、日下部には勝てない。だが、必ず退治する方法を見つけてみせる。

（あいつは、私が倒す……!）

決意を胸に抱き、私は体を引きずるようにして、歩き始めた。

13

「逃げた……？ いえ、搜索は必要ありません。ええ、そのように」
ガチャリ。

日下部は受話器を置く。

（あの状況から脱出できた……？ まさか、まだ神気を残していたとでもいうのでしょうか……ふむ、興味深い）

日下部はデスクから立ち上がり、街の夜景を見降ろした。

（いいでしょう。私がこの世界を支配するにあたっての余興として、残しておきましょう）

「それに、制服から通っている学校はすぐに分かりますから、すぐに個人を特定してあげましょう。待っていてください、私の退魔巫女さん……」フッフ、ハハ、フハハハハハ!!」

夜景が徐々に朝日に包まれていくなか、社長室に日下部の笑い声が響き渡っていた。

（くくく）

あとがき

この度は本作品をご購入いただき、誠にありがとうございます。

前から一度は書いてみたいと思っていた巫女さんモノ。神の力を宿した巫女さんが妖怪と戦う、というのは、話の展開としてはオーソドックスですが、巫女の見え目が古風でなかったり、処女喪失後すぐに力を失うのではなく、絶頂のたびに少しずつ力を失っていくという設定にしてみたりと、独自の要素を加えています。

プレイ内容は凌辱、輪姦、玩具責め、と、だいたいいつもの NoFuture 作品でした。妖怪と戦う巫女さんモノなのに、人間相手のシーンが多かったですね。巫女さんモノと聞いて、様々な妖怪による異種姦を期待された方には申し訳ありません。恐ろしい存在である妖怪を蹴散らすことのできるヒロインが、非力な人間に好き勝手されてしまうというところが、個人的にたまらないシチュエーションなのです。

今回、咲良は捕らえられ、凌辱の限りを尽くされますが、かろうじて脱出することができました。しかし、身体中を開発されてしまったので、今後の生活に大きな影響が出てしまいそうです。次話のプロットはできていますので、敏感になった身体に苦悶するヒロインの姿を、たっぷりと描写していきたいと思います。

咲良のキャラクターデザインと挿絵イラストは、イラストレーターのIxyさんに描いていただきました。可愛らしく、そして凛々しい巫女さんヒロインが、凌辱を繰り返されるにつれ、どんどん快楽に吞まれていく様子が、表情の移り変わりなどで表現されています。とても素敵なイラストを頂戴できたこと、心から感謝しております。

当サークルでは、今後も小説やゲームを通じて、様々なヒロインを題材にしていきたいと考えています。また何かの作品が皆様の目に留まることを願って、あとがきとさせていただきます。

2020/2/7 端音 乱希

奥付

発行:2020/2/7

小説:端音 乱希	twitter	https://twitter.com/nofuture_hr
	blog	https://ci-en.dlsite.com/creator/4576
挿絵:Ixy	twitter	https://twitter.com/Ixy
	fanbox	https://www.pixiv.net/fanbox/creator/4935

製作:No Future

連絡先:nofuture.hr@gmail.com

この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

本作品は成人向け作品です。18歳未満の方の購入・閲覧を禁止いたします。

本作品の全部あるいは一部を転載・配信・送信する行為を禁じます。